

---

# 魔術師と生き人形

芳野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔術師と生き人形

### 【NZコード】

N6709V

### 【作者名】

芳野

### 【あらすじ】

川で溺れて死んだはずの女は、別の世界で生き人形として蘇った。彼女を助け、生き人形にしたのは病弱な魔術師。心まで人形に近づく女と、それを観察する謎の男。魔術師と生き人形の奇妙な生活が始まつた。

## 水死

飲み込まれるのは一瞬だった。

川の深みに落ちた子供を助け、近くにいた父親とおぼしき男に渡し、自分も岸に上がろうとしたところで女は足を滑らせた。急流に足を取られ、体勢を立て直そうとする努力も空しく、女はあつとう間に水の中に飲まれてしまった。先ほどの子供とその両親の悲鳴が、女の耳にもうつすらと聞こえた。

前日に雨が降ったせいか、川の水量はかなり多かった。不運にも、女が落ちたのは子供が落ちたよりも遙かに深いところだった。女は川底に足をつけることも、岩や木につかまることもかなわず、そのまま下流に流されていった。

女は何とか浮かび上がろうともがいた。しかし、思いとは裏腹に彼女の体は沈んでいった。何とか泳ごうとして腕と足を曲げ伸ばししようとすると、ジーンズと長袖の上着が水を吸つて女の体に重くまとわりつき、思つようにも体は動かなかつた。何でこんな格好をしてきたのだろう！日焼け防止と虫除けのための服装が仇となつてしまつたと、女は自身の不運を呪つた。女は水泳にはそれなりに自信があつた。しかし、息が続かなくなり、口や鼻から水が容赦なく入り込んでくると、不幸を嘆く余裕も消えた。水面に向かつて手を必死に伸ばし、空気を求めてもがいた。夏の空の鮮やかな青色と川岸の木々の深い緑色が時々女の目に写る。パニックによつてむやみに体を動かしたことで、女の体は更に水面から離れた。夏とはいえ冷たい川の水も、女の体力と精神力を急速に奪つていき、女はついにもがくことすらできなくなつた。

「ここまで、なのだろうか。

水は女の気管に容赦なく入り込み、女の意識までも徐々に奪つて

いつた。苦しさと死への恐怖が女の感情を支配していた。脳裏にそれまでの人生が浮かぶ。ごく普通の人生、不幸もそれなりにあつたはずなのに、思い浮かぶのは幸せなものばかりだった。……子供を助けて死ぬなんて、平凡な私にそぐわないドラマチックな死に様だ。死にたくないなあ、でも、私が死んでも悲しむ人ももういないから、いいか……薄れゆく意識の中、女は心の中でつぶやいた。

？？死にたくない？

突然、聞こえた男の声に、女は少しだけ意識を取り戻した。  
そりやあ、死にたくない。この状況でそう思わない人はいないだろう。女は心の中でつぶやいた。

？？何を失つても？

いいよ、生きられるなら、助かるなら何だつてする、女は心からそう思つた。

？？ならば、こちらに来るんだ。

女が目を開けると、緑色の水面から白い手が差し出されているのが見えた。

最後の気力をふり絞つて、女は手を伸ばした。

## 水死（後書き）

初投稿です。不備などありましたらご連絡いただけるとうれしいです。

頬に柔らかなものが触れたので、女は無意識に手でふり払った。しかし、再び柔らかいものが頬に当たる。ペチペチと、今度は一度でなく、何度も繰り返し頬を叩く。その感触に、女は意識を取り戻した。

「ぎやつ！」

田を開けた女が最初に見たのは、自分を至近距離から見つめる白い猫だった。女は悲鳴を上げると同時に、反射的に猫を突き飛ばした。ふきやあ！といつ悲痛な鳴き声が部屋に響いた。しまった、やり過ぎた。女は急ぎ身を起こし、払い飛ばしてしまった猫を見やつた。

すぐ側の床に立ち上がった猫は、怒りをたたえて女をにらみ返してきた。白と黒のストライプ模様が美しい、やや大柄な猫だった。長毛の毛並みがふさふさとゆれて、何とも愛らしい。「ごめんなさい！」と女は謝罪の言葉を発したものなの、どうしたらいいか分からず、殺氣立つていてる猫を見ていた。猫と女はしばらく見つめ合っていたが、やがて猫はふいと顔を背けて、開いていた窓から出て行ってしまった。

女はため息をついて、寝台から降りた。部屋を見回して、女は困惑の表情を浮かべた。部屋は質素で、女の寝ていたベッドとテーブルセット、小さなタンスがあるだけだった。床も壁もむき出しの石材で出来ており、壁にはクロスすら張つていらない。それなりの広さはあるが、殺風景な部屋だった。

ここはどこだろう？自室ではもちろんないし、明らかにホテルや病院の類でもない。女は混乱したまま部屋の中を観察した。ベッドやテーブルは飾り気のない質素な木製。テレビやパソコンといった電化製品は見当たらず、天井にはライトすらない。明かりは窓から差し込む日差しだけだが、開け放たれた窓にはカーテンすら掛かっ

ていない。古めかしい造りの窓に近寄つて外を眺めると、女は更に混乱した。そこには延々と草原が広がつていて、町並みはかすかにさえ見えなかつた。遠くには切り立つた山脈が連なり、その頂は白く縁取られて日の光に照らされていた。

「どい、じい……」

「僕の屋敷、一般にはエヴァレット城と呼ばれてる」

一人つぶやいた言葉に対する思いがけない返答に、女は弾かれたように振り返つた。

ドアから入つてきた若い男は、女を見ると一コロと笑い、言葉を続けた。

「そして、これから君が暮らす場所もある」

「はあ？」思いがけない男の言葉に、女は思わず素つ頓狂な声を上げた。

「私がここで暮らす？」

「そうだよ。まあ、とりあえず座つて」

男は頷くと、テーブルを指さして女に座るよう促した。女が困惑の表情を浮かべたままテーブルに着いたのを確認すると、男は廊下から小さなワゴンを押して部屋の中に入れ、ドアを閉めた。

窓から差す日光が男の姿をはっきりと照らし出した。身長は180cmほどであろうか、背は女に比べると大分高いが横幅は細い。もやしとでも形容するのがぴったりで、ひょろりとして青ざめているのかと思つくらい肌の色も白い。男は膝丈の茶色い上着を羽織り、その下には質素なシャツとズボンを身につけていた。上着にはフードがついており、これをかぶつてしまえばおそらく顔は見えないだろ。女はまるで強盗か痴漢の手配写真のような姿だと思った。年は若そうに見えるが、髪は老人のように白い。髪と同じく白い眉は凜々しく、瞳は鮮やかな緑色をしており、高い知性を感じさせた。口元には笑みを浮かべ、服装の怪しさとは逆に、人好きのする印象を与えた。女は男の視線に薄ら寒いものを感じ、不安を覚えた。しかし同時に、この人物が自分にとつて危険ではないとなぜか確信していた。

ワゴンにはティーセットが載せられおり、男は手慣れた様子で茶を注いだ。二人分のカップをテーブルに置き、女と向き合つ形で席に着いた。

「さて……、どこから説明したらいいかな」男はカップを取り上げて、口元まで寄せると女に話しかけた。

「アヤも飲みなよ。あまりおいしくはないかもしけないけど」

アヤと呼ばれた女が驚きのあまり立ち上ると、イスがガターンと

派手な音を立てて後ろに倒れた。男は女の様子を見つつ、カップの中身を一口だけ飲んだ。

「何で私の名前……！」

アヤは驚愕と恐怖がないまぜになつた表情で、瞬きもせず男を見つめた。その目からは男への嫌悪感と不安がはつきりと見て取れた。「落ち着いて、とにかく座りなさい」

男はカップをすすりながらアヤに告げた。

「そんなこと！何で私の名前知ってるの！どうして私はここにいるの？大体あんた誰？何で私がここで暮らさないといけないのよ！」堰を切つたように大声を張り上げ、アヤは男に詰め寄つた。男はアヤを一警するともう一度座るよう勧めた。しかし、すっかり興奮してしまつたアヤは男を問い合わせることをやめられなかつた。

「大体人をこんなところに連れ込んで、ただで済むと思つてる？誘拐？拉致？一体なんなの？お願ひだから私を家に帰して！」

男は叫ぶアヤを静かに見つめ、彼女が喋るのに任せた。アヤは一通り思つてることをまくし立てたが、やがて男が何も言わないのに気づき、なぜ答えないのかと再び叫び始めた。男は興奮したアヤに冷ややかな視線を送り、ほんの一言だけ発した。

「もう一度言う、座れ」

その言葉を聞いた瞬間、アヤの興奮はあつという間に静まつた。自分はしてはならないことをしてしまつた、彼女はなぜかそう思い、同時に強い恥ずかしさと後悔を感じた。誘拐犯を罵つただけながら、こんな風に考える必要ないのに、アヤは思考と矛盾する自分の心境に戸惑つた。「申し訳ありません」と言いたいのを必死に押さえ（なぜ私が謝罪しなければならない！被害者は私だ！）、倒れたイスを直して座り直した。アヤは自分の心が理解できなかつたが、その戸惑いを目の前の男に知られたくない、何とか平静な表情を取り繕つた。

「……話を続けて良いかい？」

アヤが男の言葉に頷くと、男はカップを置いて話し始めた。

「单刀直入に言つ。アヤ、君は死んだ」

アヤは男の言葉にぎょっとして、反射的に叫んだ。

「私は生きてる！何言つてるのよ」

男はアヤを見据えたまま答えた。その視線にアヤは再び薄ら寒いものを感じた。

「どうやら君の記憶は少し混乱しているようだ。君は川で子供を助け、溺死した。しかし、何を捨てても生きたいと僕に願つた。だから僕は君を助けた」

アヤの脳裏に、濁流に飲まれた時の記憶が蘇つた。冷たい水、苦しい息、届かない水面……

「た、確かに川で溺れた！でも、私、こうして生きてる。大体死んだのに助けたつて矛盾してる！」

「あの水の中で、君は一度死んだ。死ぬ直前、君は何をして生きたいと願い、僕の手を取つた」

アヤは青ざめた顔で男の手を見つめた。この手は、あの時の手だ。「僕はこちら側に運び込んだ君の死体と魂を加工し、君を生き人形として蘇らせた」

人形つて、何よ、それ。

「君の体組織を加工して、こちらでの生存に適した形にカスタマイズさせてもらった。……そうだな、脈を取つてみると良い。君の心臓はもう動いていないから」

「まさか！」

アヤはそう叫ぶと、己の手首を必死に探つた。しかし、脈は本当に見つからない。

「実は呼吸も必要ないんだ。無意識にやつてるみたいだけど、息をしなくても大丈夫だよ」

私は死んで、人形になつた？何それ？

「多少は理解してくれたかな？」

呆然としているアヤに男が声をかけた。

「急激な身体の変化に、精神がついて行かないってのはよくあることだ。今日はもう休むと良い。また明日話そう」

男はそれだけ言つと、立ち上がり、ティーセットを再びワゴンに載せ、ドアの方へ歩き出した。

「待つ……」アヤは立ち上がり呼び止めようとしたが、強烈なめまいに襲われてしまい、もう一度座るしかなかつた。

「まだ体に慣れていないんだ。しばらくは休むようだ」

男はそれだけ言つと、そのまま部屋を出て行つてしまつた。

アヤは追いかけようとしたが、体の氣だるさとめまいは止まらなかつた。彼女は仕方なくベッドに潜り込んだ。

眠りに落ちる前、彼女はもう一度脈を探した。手首にも首筋にも脈動を感じることは出来なかつた。次に息を止めた。枕で口と鼻を塞ぎ、頭の中でカウントする。100、200、300……カウントがいくつ進んでも、アヤが息苦しさを感じることはなかつた。

女は、自分が人ではないものになつたことを理解した。

「……何でこの女は枕を顔の上に載せて寝ているんでしょうねえ」  
女の声が聞こえて、アヤは目を覚ました。

「ええ、昨日は普通でしたよ。向こうではそつなんですかね?」「馬鹿そうな寝顔が見えなくていいってことかもしませんねえ」会話をしているようだ。しかし、一人の声しか聞こえない。誰だろ?、この声は?アヤはぼんやりと考えるが、声の主に思い当たる人物はいなかつた。目を開けると、顔の上に枕が載っているのに気づいた。昨夜、口と鼻を塞いで息を止めていて、そのうちに眠ってしまったのを思い出した。そして、自分の置かれた非常識な状況を思い出した。

私は死んで、どこかに連れてこられて、人形になつた。

こんな状況に自分が巻き込まれるなんて、枕を顔に載せて寝ついたのと同じくらい間抜けで滑稽だ。アヤは自嘲した。声の主はおそらくこの屋敷の人間だろう。昨日の男は城と言つた。まさか一人ではあるまい。そう考えて、アヤはもう一眠りしたい気になつた。体は氣だるく、重い。彼女を取り巻く状況は、彼女の理解を既に超えていた。悪い冗談、こんなことがある訳がない。アヤの理性は未だそう捉えていたが、なぜか感情ではこの異常な自体を受け入れていた。なぜだろう、と彼女は思つた。まるで体と頭が別々の物のようだ。もう一眠りして目を覚ましたら、自分の家にいるのではないかと思い、アヤは再び目を閉じた。

しかし、二度寝はすぐに妨げられた。顔の上の枕が取り払われ、日の光が彼女の顔を照らした。

目を開けると、また猫が目の前にいた。今度は彼女の体の脇にちよこんと座つていた。しかし、猫よりもベッドの脇にいる人影に気

を取られ、彼女はとっさに動くことができなかつた。

その人影には、顔がなかつた。

眠気は一気に消えた。アヤは跳ね起きると、人影から逃げるようにベッドから飛び降りた。影はフードのついた黒いローブを着ており、起き上がつたアヤからはその顔は見えなくなつた。恐怖と驚愕で怯えていたアヤだつたが、自分の見たのは見間違えだつたのかと思い、そつと、もう一度顔をのぞき込んだ。

やはり、顔はなかつた。その顔はのつぱりとしていて、本来なら目や口があるはずの場所にも何もなかつた。怯えて凍り付いていたアヤに、そのヒト？は目もくれず、廊下から部屋の中へ何かの入った籠を運び入れていた。アヤはそつと声をかけてみたが、それは何の反応も示さなかつた。全ての籠をベッド脇に積むと、それは一言も発さないままさつさと出て行つてしまつた。

さつき喋つていた女は今のじやないの？アヤの頭は混乱した。ふと視線を下げると、ベッドの上では猫がアヤを見つめていた。まるで狼狽する彼女を觀察し、あざ笑つてゐるかのように見えた。アヤも猫を見つめ返した。しかし、猫の方は彼女に対する興味を失つたように目をそらし、窓辺から外へと行つてしまつた。アヤは部屋に一人残された。

よく分からぬ世界で、よく分からぬことが起こるのは仕方がない。気を取り直して、アヤは先ほど運び込まれた籠をのぞき込んだ。

「あ、私の服」

一つの籠に、見慣れたジーンズとシャツ、それに下着が入つていた。それは間違いなく彼女の物で、彼女が溺れた時に着ていた物だつた。服は綺麗に洗われ、丁寧にたたまれていた。

その他の籠も順に見ていつたが、中に納められていたのはシーツやタオル、石けんといった日常に使う雑貨の数々だつた。

「ここで、暮らす……」

アヤは前日に男に言われた言葉を思い出した。生活用品が運びこまれたのは明らかにそのためだった。怪しげな男、顔のない黒服、口の悪い女、そして愛想のない猫……先のことを考えると気が滅入るばかりだった。

とりあえず顔でも洗おう、そう呟き、彼女はさっそく差し入れられたタオルを手に、洗面台に向かった。部屋には廊下へと続くドアの他に、もう一つ扉があった。その向こうには洗面台と浴槽が置いてある小部屋があった。

洗面台の脇には水差しが置かれていた。おそらく先ほどの黒服が用意してくれたのだろう。水差しには適度な暖かさの湯がたっぷりと入っていた。栓をした洗面台にその湯を流し入れ、アヤは顔を洗つた。寝汗を流すと、アヤの憂鬱は少しだけ晴れたような気がした。顔を拭き、ふと、洗面台の鏡を見て、彼女は自分がコンタクトを外していないことに気づいた。二日入れっぱなし? まずい、早く外さなければ……目の状態をチェックしようと鏡をのぞき込んだ。

「あれ、コンタクト、ない……」

まぶたを裏返しても、目玉をぐりぐりと動かしても、レンズは見つからなかつた。レンズを長時間入れていれば目は充血するはずだが、両目とも充血もなく、疲れ目や違和感も感じなかつた。

「目が、見えている?」

アヤはかなり強度の近視で、裸眼で生活することなどあり得なかつた。川で溺れた時も、彼女は確かにコンタクトレンズを入れていたはずだつた。そのため、自分が眼鏡もコンタクトもない状態でいることに驚いた。これは、カスタマイズとやらの影響なのだろうか。思ひがけない奇跡に、アヤの心は踊つた。しかし、他の部分も大幅に改造されているかもしれないことに思い当たり、アヤの背筋は凍つた。

アヤは眼球を観察するのをやめ、鏡に映る自分の姿をおそれおそれ確認した。

肩まである黒髪は記憶のままで、顔はあまり変わっていない。それどころか、以前より心なしか元気に見えた。常態化していた目の下の隈が消え、頸にあつたはずの吹き出物もすっかり治っていた。視線を体に移し、ふと、自分が見慣れぬ服を着ていることに気づいた。模様も飾りもない、膝丈で半袖のベージュ色のワンピース。ワンピースと言うよりは、病人が手術の前後に着るような簡素な服だった。よくよく見れば、下着も身に着けていない。思えば、目覚めた時からずつとこの服を着ていた。下着も、多分着けていなかつた。どうして田のことにも、服のことにも気がつかなかつたのだろう、大体ブラはともかく、パンツ履いてないのに気づかなかつてないよなあ。アヤは自分の間抜けさに呆れた。この服、誰が着せたんだろう？元の服を脱がしたのは？ふと考へて、アヤは赤面した。

服を脱ぎ捨て、気を取り直す。体の前面にも背面にも、目立つた傷やあざはなかつた。あの激流に飲まれて、怪我一つしていないと、いつのまにか、田と同じく、こちらも治してくれたのかもしれなかつた。

体中を一通りチェックしてみて、とりあえず田立つ異変がないことにアヤは安堵した。アヤはベッドのある部屋へと戻り、元着ていた服を一式を取り出して身につけた。

「あれ？」

アヤは服が若干自分のサイズと合っていないことに気づいた。下着も、若干緩い。洗濯で伸びてしまつたのだろうか。彼女は元の世界の服はもうこれしかないと不満を感じたが、安物だし仕方ないかとすぐに思い直した。

「さあ。あの人に会いに行かなきや」

身支度を終えたアヤは、廊下へと続くドアを開いた。

身支度を調べ、勢い勇んで部屋を出たアヤであつたが、扉を開けてすぐにその気勢はそがれてしまった。ドアの外には探しに行こうとした男が立っていた。男は彼女の姿を見るとほほえみ、今日は場所を変えて話そうと言つた。出鼻をくじかれた形のアヤは、うなづいて、先導する男の後について行くしかなかつた。

薄暗い廊下を通り、螺旋階段を下ると、回廊に取り囲まれた城の中庭へと案内された。城は中心が抜けた円筒状をしており、この庭はその中心部分にあるらしい。中庭と言つても、テーブルやイス、ベンチが設置してあるだけで、他は植木の一本もない殺風景な場所だつた。床にはタイルで模様が描かれていたが、タイルはわずかに元の色を残していくんでいた。以前はこの庭園を美しく飾つていただろう。しかし、長い年月と上から降り注ぐ日の光がその彩りをすでにかき消していた。ふと、アヤはベンチの陰に白い物がいるのに気がついた。よく見るとそれは部屋にいた猫だつた。しばらく猫を見つめていたアヤだが、男に促されて庭の中央にあるテーブルに座つた。

二人が来たのとは別の方から、黒い影がワゴンを押して現れた。それはアヤが朝方に見た、黒服と同じものだつた。やはり、顔がない。ただ、着ているのは朝とは異なり白いローブだつた。アヤは息を飲んでそれを見つめていた。それは一人の座るテーブルの横で止まり、給仕を始めた。間近で觀察し、アヤはそれが人形であることに気づいた。ローブから見える顔はよく見れば木で出来ていた。人形はアヤの視線を気にかける様子もなく、ポットから紅茶を注ぎ、ティーセットと茶菓子の載つた皿をテーブルに置いた。カップや皿を持つ手と指もやはり木製だつた。不思議なのはその指や体が滑らかに動いていることだつた。球体関節人形など、関節が自由に動く

人形があることはアヤも知っていた。しかし、目の前のそれには球体関節もなければ、部品を組み合わせて動かせるようにした形跡もない。裾から見えている手首から先にはつなぎ目すら見えなかつた。ローブの下はどうなつているんだろう？好奇心を露わにジロジロと観察を続けるアヤに構わず、人形は給仕を終えるとワゴンを押してあつという間に立ち去つてしまつた。

遠ざかつていく人形の背中を見つめながら、あれはどういう仕組みなのだろうかとあれこれ思いを巡らせていたアヤだつたが、目の前の男から視線を感じて、思考を中断させた。いけない。今日の目的は、この男から自分が置かれている状況を聞き出すことだつた、とアヤは改めて男に向き直つた。男は昨日とほぼ変わらない服装で、相変わらず青白い顔色をしていた。

「体の調子はどうだい？」

男はほほえみながらアヤに尋ね、ティーカップを手に取つた。テーブルには紅茶の他に茶菓子が置かれていた。入れられたばかりの紅茶は花のよくな甘い香りを、焼きたてとおぼしきクッキーとスコーンは香ばしい匂いを漂わせていた。

「……おかげさまで、調子は良いです」

アヤがそう告げると、男は改めてアヤの顔を眺め、うんうんとうなずいた。

男の目を見て、アヤは一つのことに気づいた。男はアヤを観察していた。男がアヤに向ける視線は、たつた今、アヤが人形に向けていたのと同じものだつた。口元には微笑を浮かべてはいるものの、その目は彼女の行動を観察し、分析しようとするものだつた。思い返せば、前日部屋を訪問された時もそつだつた。この男は、私をモノとして見ている。その考えはアヤを不快にさせたが、男から感じていた不安や不気味さの正体をつかめたような気がして、彼女は少しだけ気分を落ち着かせた。アヤは覚悟を決め、男を見据えて口を開いた。

「今日は、この状況についてご説明いただけるのでしょうか？」

男はニヤリと笑い、アヤに尋ねた。

「何が聞きたいのかな？何でも聞いて良いよ」

男はもつたいたぶつた態度で皿のクッキーを手にひとつて口に含んだ。

「まず、ここはどこですか？」

「ここはメレ大陸、レベット公国の東端、コーラ市のそのまま東端にあるエヴァレット平原。君の部屋から草原が見えただろ？あの草原を眺め下ろす丘の上に立つていてからエヴァレット城と呼ばれてる」

当然だが全く知らない地名。アヤは自分の推測が、できれば当たつていないうことを祈りながら尋ねた。

「そういうことではなく……ここは、私の知っている世界ではないような気がするのですが」

「うん、そうだね。ここは君のいた世界からは時間も空間も隔てたところにある、全く異なる世界だよ」

半ば分かつていたこととはいえ、アヤは男の言葉にショックを受けた。

「異世界、ですか」アヤは呆然と呟いた。

「そうだよ」紅茶をすすりながら、男は平然と答えた。

「どうやって、私を連れてきたんですか？」

「空間転移の魔術」

「魔術」思いがけぬ単語にくじけそうになつたアヤだつたが、気を取り直して質問を続ける。

「魔法が使えるのですか？」

「この世界には君の世界には存在しないエネルギーがあつてね、我々はそれを魔力と呼んでいる。これを制御し、利用する術を魔術と言つているんだ」

「それは、呪文を唱えたら手のひらから炎が出たりするようなものですか？」

「手から炎？燃える物がないのに炎が発生するなんておかしいだろう」

男は一つ目のクッキーをかじりながら答えた。その顔は少しだけ呆れていた。

「魔力を使ってできることは大きく分けて一つ。物質への干渉と空間の制御だ。そうだ、ちょっと実演してみよう」

男は懐から鉛筆を取り出し、アヤに手渡した。

「これは君の世界にもあつただろう。ごく普通の鉛筆だ」木で出来たシンプルな鉛筆だつた。長さは10㌢ほどで、先端にはナイフで削つたような跡があつた。

「これに、魔術を使ってみよう」

アヤが鉛筆を返すと、男はなにやら呟きながら手のひらの鉛筆に触れた。見た目には何の変化も起こらない。しばらくなにやら呟いていたが、やがて男は再びアヤに鉛筆を手渡した。

受け取つた瞬間に、アヤは鉛筆に変化が起こつていていた。先ほどまで堅かつた木製の柄は、グニャグニヤと柔らかいゴムのようになつていた。

「これ！どうやつたんですか？」

「魔力をつかつて、柄の部分の性質を変えた」

目の前で起こつたことに興奮しているアヤに、男はやや得意げに答えた。

「本来なら木材は堅いが、魔力を使って適切にコントロールすれば、このように柔らかくすることが出来る。魔力をコントロールする技術が魔術だ」

柄は木材とは思えないほど柔らかく、弾力性があった。しばらく持ち上げたり握つたりして鉛筆を観察していたアヤは、あることに気がついた。

「あれ、でも、芯は硬いまま……」

男は楽しそうに答えた。

「よく気がついたね。ちょっと、力を入れて折り曲げてみて」

言われたとおり、鉛筆を折り曲げようとした。柄がこれだけ柔らかいのだ。中に入つた黒鉛の芯は柔らかいのだから鉛筆は簡単に折

れるはずだつた。しかし、アヤがいくら力をこめても、鉛筆は曲がらなかつた。

「どうじうことですか？」

「芯の部分は柄とは逆に硬化させた」

「そんな器用なことが出来るんですか！」

「僕は一流の魔術師だからね」

男はニヤリと笑つた。

「だから一度死んだ君の体を、生き人形に変えることも出来たんだ」  
なるほどと思いつつも、アヤは疑問を感じた。

「待つて！ 物体の性質を変えることと、それを動かすことはまた別の問題でしょ。死んだ物を生き返らせるのは木材を柔らかくさせるのとは違うでしょ？」

「生きている状態と死んでいる状態、何が違うと思う？」

思わず質問に戸惑つたが、アヤは何か答えを返した。

「ええと……生命活動の有無？ 循環系や呼吸器系が動いていて、生体の代謝や恒常性を維持するためのシステムが正常に動いていることが生きていることと言えるのでは？」

アヤの返答に男は軽く目を見開き、面白げにほほえんだ。

「そうだ。システムの維持、これが重要だ。傷ついた体を修復し、より適切な状態へと修復するのは、先ほど見せた術とそれほど変わらない。肉体を構成する要素を適切な形に変化させ、元通りに配置し直せばいい」

「でも、私は息もしていなし、血も流れていないでしょ。ちつとも元通りじゃないじゃない！」

アヤはつい叫んでしまつたが、男は気にするそぶりも見せず、話を続けた。

「問題はシステムをどうするか、だ。一度死んだ物は生き返らない。どういう訳か、一度死んでしまつた物はどんなにきれいに修復しても生き返ることはないんだ。姿形をどれだけ元通りに直しても、システムが元に戻らないんだよ」

男は紅茶を一口飲み、続けた。

「……だが、システムを無理矢理維持させれば話は別だ」

「無理矢理？」

「そう、魔力を使って、無理矢理システムを動かすんだ。……さつきの鉛筆を返して」

鉛筆を手にすると、男はまたなにやら呟き始めた。男が鉛筆を机に置くと、鉛筆は尖った側を下にして独りでに立ち上がった。そして、ゆっくりと回転し始めた。アヤはその光景を呆然と見つめた。「これと同じことを君の体に施した。今、君の体は魔力によつて無理矢理維持されているような状態だ。勘違いしているようだが、血液は以前と同じように体中を循環している。ただし、その循環は術によつてコントロールされている。また、血液が運んでいるのは栄養や酸素ではなく、魔力だ。体中に魔力を行き渡らせることで、何とか生命活動を維持している状態だ」

「……そんなことができるなら、なぜこの世界の人はそれを使わないの？」

「一つは技術的な問題だ。これだけのことが出来る魔術師は世界にもそうはない。メンテナンスの手間だつてかかる。それに、この術には大量の魔力を消費する。それだけの魔力を貯めて、使用することはそうそう出来ることじやない。君にはまだ分からぬかもしれないが、君は存在するだけで大量の魔力を消費しているんだ。そのコストたるや、相当なものだ」

「そんな術を、なぜ私で試したの？」

「いろいろ理由はあるが、一つにはこの世界でこういう術を人間で試すことは禁止されていることがある。別の世界から連れてきた君はこの世界の人間じやないから、僕は禁を犯したことにならない」

「それだけ！？」アヤは思わず怒鳴つた。

「一度やってみたかつた、というのもある」

男は軽く答えた。

「まあ、この辺について君はあんまり気にしないで良いよ。君は死

にかけていて、何を捨てても生き延びたいと願っていた。だから、  
僕は君を助けた。それだけだよ」

「……」

どうにも納得できなかつたが、アヤはそれをどう表現したらいい  
か分からなかつた。

俯いて考え込んでいるアヤを横目で見ながら、男はスコーンを食  
べ始めた。

「……お茶でも飲んだら？ もう冷めちゃったと想つたけど」

黙りこんで何やら考え込んでいた風情のアヤに、男は声をかけた。アヤは顔を上げて、男を見つめた。いろいろと言いたいことも聞きたいこともあるが、何をどう言つたら良いのか分からぬ。男の言うとおり、お茶でも飲んで少し頭を冷やそう、そう思つてアヤはティーカップに手を伸ばた。紅茶はすっかり冷めていたが、ほのかに香りは残つていた。

「うぐえつ！？！？！？」

カップの中の茶色い液体を口にした途端、アヤは奇声を発して含んだものを吐き出した。

「苦つつつつ！ まずつつつ！」

香りや見た目は完全に紅茶だった。しかし、味の方はアヤの知るそれとはまったく違う物だった。とにかく苦く、えぐみが強い。口当たりは最悪で、何かピリピリとした刺激まで感じる。吐き出してなお残る後味の悪さに、アヤは顔をしかめた。花のような爽やかな香りだけが唯一の救いだった。

「大げさだね、そんなにまずかった？」

「よくこんなもの飲めますね！ 苦いし、まずいし、しかも何かピリする……」

「このピリピリがいいんだけどね……まあ、飲んでればそのうち慣れるよ。嗜好品なんてそんなものだろ？」

「いや、無理……」

アヤは口直しへとクッキーを手に取つた。しかし、一口かじるとすぐに後悔した。クッキーなのに辛い、渋い。口を押さえて青くなつているアヤを、男は面白そうに眺めていた。

「この世界の食べ物はどれもあんな風にマズいんですか？」

「そんなにまずい？」

「ヤーヤ笑いながら、男は空になつた自分のカップにおかわりを注いだ。

「君もいる?」

「いりません!」

アヤは即座に答えた。

しばらくすると、白いローブの人形が再び中庭に現れ、新しいお茶とサンドイッチを運んできた。人形は水差しと木製のコップも持つてきてくれていた。アヤは恐る恐る水を口にしたが、さすがに何の味もしなかつた。紅茶とクッキーの余韻が口の中からよけやく消えて、アヤは心中でため息をついた。

「……あれも生き人形ですか?」

一杯目の水を飲みながら、アヤは男に尋ねた。あののっぺらぼうと同じというのは、さすがに辛い。

「違う、あれは自動人形。与えた命令をこなすだけで、自意識なんて持つてないない。もちろん魂もね」

「魂?……私にはあるんですか」

「当然だ。死体を修復しシステムを維持させただけでは生き返らない。魂がなければ体に意識や精神は宿らない」

「あの、魂つて何なのでしょう。よく分からぬのですが」

男はサンドイッチをつまんでいた。レタスのような野菜とハムのような物が挟まつたシンプルなもので、見た目はやはり美味しそうに見えたが、アヤは手をつけようとは思わなかつた。

「一般には、魂は命そのものであり、精神と肉体をつなぐもの、とよく言われるね。構成した術式に魔力を流す媒体でもある。ただ、定義するのは難しい。いくつかの説はあるけど、実際の所はよく分かつていなことが多い」

「魂が命そのものということは、死んだら魂はなくなるのでは?」

「なくなるよ。ただ、魂がいつ肉体から離れるかは一律じゃない。状況にもよるけど、死んでからしばらくの間、肉体と魂が離れない

ことはそれほど珍しい事じやない。魂が肉体から離れないうちに肉体の方が修復されて生存に適した状態になれば、魂は再び元の肉体に宿る」

「私の場合も死んすぐだったから、魂がまだすぐそばにあった。だから、肉体が修復された時点で魂が戻ったということですか」

「そうだ」

魔術に魔力、魂……おどき話に出てくる単語ばかりで、アヤは内心頭を抱えた。ただ、男の話す技術や方法論は彼女の好奇心を確實に刺激していた。アヤは質問を続けた。

「そういえば、ここでは魂は観測できるんですか？」

「魔力を使うことで存在を観測することができる。なぜなのかは分からぬが、魂と魔力は性質が似ていて、相互に干渉し合つんだ。だから、魔術の行使に魂の存在は必須となる。魔術師は自身の魂を媒介に魔力をコントロールしているからね」

「……もしかして私も魔術を使える？」

「可能性はある。まだ詳しく分析はしていないが、おそらくは君の魂も似たような性質をしているだろう。僕の術で君の魂を扱うことが出来たしね。それに、僕の魂ともつまいこと融合したみたいだし」

「は？」

またしても思いがけない発言に、アヤの思考は一瞬止まった。

「君自身の魂の補強と、体に施した魔術の管理のため、僕の魂の1分の1を君の魂と融合させた」

「……どういうことですか？」

アヤの体に、冷たい物が走った。

「こちらの世界に来る際に、君は魂の9分の2を失った。残った魂で最適に体を管理させるためには、身体をカスタマイズする必要があつた。だから、魂の9分の1を情報を得るために使わせてもらつた。残りの3分の2に、僕の魂11分の1を足した」

「私の魂の3分の1はあなたの魂つてこと！？」

「違う。魂には体積はないんだ。11とか9というのはそれぞれの

魂に固有の最小分割数だ。つまり、君の現在の魂の7分の1が僕の魂由来といえる

あまりのことに、アヤはめまいを感じた。体だけじゃなく、魂までいじられたの？ずっと感じていた感情の違和感の原因を知り、あまりのことに吐き気すら覚えた。

「……気持ち悪い」

アヤが思わずこぼしてしまった本音に、男の表情が消えた。アヤは自分の言葉の意味に、言つてはいけないことを言つてしまつたことに気づいた。無言で何も言わない男に、アヤは慌てて立ち上がり、頭を下げる。

「あの、失礼なことを言つてすみません！助けていただいたことは大変感謝しています。私は助かって良かつたつて思つてます。本当です、信じて下さい！体だつて、目も見えるようになつて嬉しいし、前より健康になつたの、分かつてゐるんです。だから、本当にすみません」

男は無表情のまま、頭を下げて弁明を続けるアヤを見つめていた。  
「……別に構わないよ。そりゃあ、知らない間に自分の体や魂を怪しい男にいじられていたら気持ちも悪いわ」

「そんなこと！」

「君の中にある僕の魂は、今でも僕とつながつてゐる。君が感じてることや考へていることは、僕にも伝わるんだ」

アヤは絶句して、何も言えなかつた。

「ただ、悪いけど、君から僕の魂を取り出すことはできない。魔術の管理をできなくなる恐れがあるし、すでに二つの魂の融合は進んでいるから、僕の魂だけを切り取ることもできない」

青くなつて押し黙つてゐるアヤに、男は冷たく言い放つた。

「はつきり言う。君は僕の実験の被検体だ。君は禁術を試すための最高の被検体だつた。だから助けた」

「そんな」

「一つ教えてあげよう。実はね、君をこちうに連れてきた魔術も禁

術の一つさ。遠く離れた異世界から、時空を超えて移動させることができるのは、自分の属する世界と因果の薄い物体だけだ。??因果というものはその世界とのつながりのことだ。家族、友人、恋人、仕事に同僚、大切にしているモノ……」

アヤの手が強く握られた。

「実際のところ、君には元の世界、元の生活に対する未練なんてないだろ？？君はこちらに来て、一度も帰りたいとは思わなかつたはずだ」

アヤの体がピクリと反応する。？？やめて、聞きたくない。

「聞きたくない、か。それはそつだろ？？君は家族を失い、身体にも精神にも問題を抱え、最悪の形で仕事を失つた。そして、唯一の心のよりどころだつた恋人すら奪われた。君は自分の属する世界に心底ウンザリしていて、世界に対して愛想を尽かしていた。だから、死体とはいこちらに来られたんだ」

「……」

「別に、君が僕をどう思おうとどうだつて良いんだ。僕だつて、君の過去に正直興味などない。ただ、君にはこれからもここに留まつてもらわないとならない」

「……なぜ」

「まだ、禁術に関するデータが完全に取れていないし、他に試したいこともまだたくさんあるんだ」

アヤは思わず後ずさつた。足にイスが引っかかり、尻餅をついた。無様なアヤを見下ろし、男はニヤニヤと笑つた。

「別に、心配しなくても良い。体や魂をこれ以上いじる」ことはしない。一応、僕は君を人間として扱う。ここにいるなら、最低限の生活も保障する。……まあ、逃げ出しても構わないよ。また次を探すだけだから。もっとも、魔力の供給が絶たれたら、君は壊れてまた死ぬだけだけね」

何と答えて良いか分からず、アヤは男を見上げていた。男はアヤの視線に一瞬バツの悪そうな顔を浮かべたが、すぐにその表情を消

した。

「今日は僕のくらこにしよう。……ひどこいとを書いて悪かったね  
男はそう言って去っていった。アヤは呆然と、その背中を見送つ  
た。

女に背を向けた男は、ひとり自嘲の笑みを浮かべていた。

男が行ってしまった後も、女はひとり中庭に残っていた。

アヤは、水の入ったコップを片手にベンチに座り、ぼんやりと空を眺めていた。中庭は静かで、時折鳥の鳴き声と自動人形の行き交う音だけが聞こえてきた。なぜか、人間は一人も見当たらなかつた。そういえばと、アヤはこちらに来て以来、未だ男以外の人間を一人も見かけていないことに気づいた。中庭には少なくとも2時間以上はいたが、その間に見かけたのは人形だけで、話し声すら聞こえては来なかつた。これだけの城だ。仮に住んでいるのがあの男だけだとしても、維持管理のために数十人は雇われていてもおかしくない。しかし、人の気配は全くしない。その割に、どこを見ても掃除は行き届いている。中庭も殺風景なだけで、手入れ自体は手入れ自体はきちんとされている。異世界とはい、全く奇妙な城だ。

どうせ誰も見てないし、アヤは思い切つてベンチに寝転がつた。晴れてはいるが、ぼやけた薄い青色の空を見上げ、アヤは一人ため息をつき、目を閉じた。

「私も言葉が悪かったし、怒るのは仕方ないと思うんだけど、どうしたもんかなあ……」

アヤは一人呟いた。男が吐き捨てた言葉を思い出す。確かにアヤは元の世界に帰りたいと思つてはいなかつた。帰つたつて、何にもないし、誰も待つてない。全て、あの男の言つた通りだつた。あれから、生きているのが面倒くさくて、でも死ぬのも面倒くさくて、ただ生きていただけ。アヤは心の中でつぶやいた。働きもせず、貯金と親の遺産を食いつぶすだけの日々。心配して連絡をくれたかつての同僚や数少ない友人とも自分から関係を絶つた。その中には恋人といえる関係の人も含まれていた。

「……人間は、面倒くさい……」

ふと、視線を感じて目を開けると、足下に猫がいた。猫としては大型な体に、白と黒の縞々模様。ふさふさとした毛で隠れていたが、首には赤い首輪が巻かれていた。アヤは追い払おうと足を振り、にらみつけた。しかし、猫は全く意に介さない様子で、じつと座っていた。蹴る真似をしても一向に動こうとしない様子を見て、アヤは猫を追い払うのを諦めた。

「……あんた、ここペット？ 私あんたのご主人怒らせちゃつたみたい。どうしたらいいかな？」

アヤは猫に向かつて語りかけた。猫はのんびりとあぐびをしていた。

「ああ言われたけど、出て行く気はないよ。助けてもらつたことは本当に感謝してるんだ。だから、役に立てるなら立ちたいの」「なら、そう伝えなさいな」

「そう言つたつもりなんだけどなあ。大体心が読めるなら、私がそう思つてるの分かるだろ？ うう……ええ！」

「耳障りな声をあげないでくれないかしら？」

顔を洗つている猫が、確かに喋つた。アヤは起き上がりつてまじまじと猫を見つめた。

「この世界では、動物もしゃべるの？」

「私は旦那様の使い魔です。その辺の生き物と一緒にしないで下さいな」

「使い魔！ ますますファンタジーっぽくなってきたわね」

アヤは猫の頭をなでようと手を伸ばした。猫は嫌そうに顔をしかめて、体を横に向けた。

「私の方が先輩よ、生き人形。少しばらまえたらいかが」猫は嫌味たらしく言つと、アヤの手をシッポでぴしゃりと叩いた。

アヤが謝罪し、挨拶代わりにと残つていたサンドイッチを渡すと、ぐちぐちと言いつつも猫は少し機嫌を直したようだつた。猫はティ

イと名乗り、自分は主人と少年時代からの付き合いで、片腕のよう  
な存在であると語った。

「それでティイさん、どうやって謝つたらいいですかね」

「まあ、しばらくお待ちなさいな。今回の一件、旦那様も落ち込んでると思うのよ」

「何で？怒らせたのは私なのに」

「旦那様はねえ、とてもお優しくて慎み深い方なの。だから、あなたのような取るに足らないもの相手でも、相手を傷つけてしまうことをとてもお嫌いになるの。特にね、感情的になってしまった後はいつも後悔してらっしゃる」

「そんなに纖細には見えなかつたけど」

猫はキッと睨んで、シッポでアヤの手を再び打った。

「痛いなあ」

「あなたののような下賤な人形に、旦那様の何が分かると言うのですか。大体、あなたがお尋ねになるから話して差し上げているのよ」

「そうでした。すみません」

アヤは素直に頭を下げた。

「それで、いつ謝りに行けばいいですかね」

「そうねえ……今はタイミングが悪いのよねえ。明後日は査察官がいらっしゃる日ですから、明日は朝からお忙しいはず。査察官がお帰りになつた後なら良いのではないかしら」

「査察官？」

「魔力の大量使用の件でしきう。の方たちはうるさいのよ。しかも、隙あらば旦那様の研究成果を盗もうとする泥棒なの。旦那様に直接手は出せない腰抜けのくせに、態度だけは偉そつだから、余計また腹が立つのよ」

ティイは怒りを感じているのだらつ。毛並みを逆立たせ、ものすごい顔をしていた。

「魔力の大量使用って、もしかして私のせい？」

「そうよ。あんたみたいな小娘を生き返らせるために、旦那様はと

んでもない危険を冒したのよ。感謝なさいー！」

「はい……」

アヤは小さくなつて、答えた。

ティイと話している内に、空はすっかり赤く染まつていた。中庭には、テーブルを片付けに白ローブの人形がやつて来ていた。そろそろ部屋に戻ろうかと立ち上がつたアヤに、ティイが声をかけた。

「そうそう、明後日、査察官がいらっしゃる時は、あなたは部屋に隠れて絶対に出ちゃダメよ」

「なぜ？」

「……色々面倒なのよ。禁術のこともあるしね

「そう、分かつたわ。といひで、一つお願ひがあるんですが

「何かしら」

「私の部屋、どこだつたかしら……」

猫は冷たい田で、アヤを見据えた。

中庭での一件から一日。

ティイの話では、今日、査察官とやらがこの城に来るらしい。部屋に隠れておとなしくしていろとの指示だったのだが、アヤはありがたく懶眠をむさぼっていた。

もつとも、この城の中で彼女に出来ることはないと言つて良かった。この前日も、アヤは何か手伝えることはないかとティイに尋ねた。しかし、屋敷の間取りすら分かっていないあなたに何が出来るのかしら、と冷たくあしらわれてしまった。あげく、私はあなたと違つて忙しいから、私の仕事を邪魔しないで頂戴とまで言われてしまった。ただ、ここは異世界。生活様式はアヤのそれまでの現代日本とは何もかもが異なる。役立たずといつ猫の指摘ももつともなことであった。仕方なく、アヤは部屋の片付けをして一日を過げし。邪魔にならないようにと隅に寄せておいた服や日用品を部屋のタンスにしまい、使いやすいように配置をせると、殺風景だった部屋にも多少の生活感が漂つた。

しかし、部屋の掃除はアヤに驚くほどの疲労感をもたらした。片付けと言つても、服や小物を整理し、家具を少し移動させただけの軽作業である。片付けの所要時間はおよそ2時間。起床したのも割とゆっくりだつたため、活動していた時間はおよそ5時間程度。夕方にもならぬうちに眠りにつき、気がつけば朝を迎えていた。お茶会の日も、夕方部屋に戻つてベッドに横たわつていたら、いつの間にか眠つてしまつていた。こちらに来て、初めて目覚めた日のような気分の悪さや氣だるさは感じなかつたが、未だアヤの体は本調子ではないのだ。

窓から、何やら「シロシロ」と音がした。起き上がり窓に近寄ると、

ティイがいた。窓を開けて中に入れてやると、猫は部屋の中を見渡して呟いた。

「大分マシになつたわねえ」

「おかげさまで」

猫はピヨンと跳ねて、タンスの上に座つた。

「今日は査察官がいらっしゃるの。いいこと? 絶対に部屋から出ちやダメよ。内側から鍵もかけて。私が行つたら、窓もちゃんと閉めなさいね」

「分かつてるわ。……で、いつ来るの?」

アヤは猫とベッドに座り、猫と向かい合つた。

「もうじきいらっしゃると思うわ。まあ、すぐにお帰りになるとは思うのだけど」

「終わつたら教えてくれる? さすがに窓も開けられないんじや暗すきるわ」

「暗くても見えるでしょ。人形のくせに贅沢よ」

一昨日のお茶会の後、薄暗い廊下をティイに先導されて部屋まで帰つた際のことだ。窓もないけど意外と明るいのね、と呟いたアヤに、それは目が暗い中でも見えるようになつたからだと、猫が教えてくれた。

「そりや そつだけど。でも、昼間なのにずっと暗いことにすると、何だかおかしくなりそうだ」

「そんな長くはかかるないと思うわ。お帰りになつたらまた来るから、とにかく大人しくしていてね」

「了解です」

ティイは体を起こすと、窓から出て行つた。

猫が行つてしまつてしまはらくして、アヤは窓を閉めようと窓辺によつた。ふと、草原に大きな影がいるのが見えた。よく見ると、それは犬のような姿をした大きな獣だった。それはアヤが見たことのあるどんな大型犬よりも、一回り以上は大きく見えた。体型は筋骨

たくましくずんぐりとしていたが、犬はその重そうな姿とは対照的に、何かを追いかけるように颯爽と草原を駆け回っていた。アヤは誰か他にもいるかもしないと考へ、とっさに窓から身を隠してしばらく様子をうかがつた。しかし、人間がいる様子はなかつたので、アヤは手早く鎧戸と窓を閉めた。鎧戸を閉める一瞬、獣がこちらを見ているような気がしたが、窓を閉めてベッドに戻つたアヤは、そのことをすぐに忘れた。

獣は確かに彼女を見つめていた。

薄闇のなかでまじろんでいたアヤだったが、そのまじろみは突如として破られた。

静寂に包まれていた屋敷に、バチャリといつ不気味な音が響いた。大きな水風船がはじけ飛んだような音と同時に、何やら悲鳴のような声がかすかに聞こえた。壁や床が振動で小刻みに揺れ、窓がカタカタと音を立てた。

爆発？ それとも地震？ 小さいながら、揺れはまだ収まつていなかつた。ベッドから立ち上がったアヤは廊下へとつながるドアに走り寄つた。ドアを開けようとしたところで、外に出るなと言つ猫の忠告が頭をよぎつた。ティイは絶対に部屋を出るなと言つた。この揺れは、査察とやらにに関連している可能性もある。どうしようか迷つている間に、揺れは徐々に収まつてきた。ホッとして、アヤはドアにもたれるように座り込んだ。

ふと、廊下を這いするような静かな音が聞こえた。その気配はアヤの部屋の前で止まつた。音からして人ではない。アヤは緊張して、息を潜めた。

「大丈夫かい？」

ドアの向こうから低い女の声がした。

「ティイ？ 何があつたの？」

アヤがドアを開けようとすると、ティイは開けるなと鋭い声で制した。

「でも」

「まだ外に出てはダメ。大丈夫だから、もうしばらくここに隠れていなさい。何があつても、絶対に出てはダメ」

「……分かった」

アヤが言つと、後で必ず来るから、と言い残して去つていつた。

遠ざかっていく気配に、アヤは何となく違和感を感じた。しかし、その正体は分からなかつた。

再度の異変に備え、アヤはドアの前に座り込んでいたが、その後は何も起こらなかつた。ドアに耳をつけて外の様子をうかがつたが、屋敷は元の静寂を取り戻していた。

破裂音、それに続く地震のような揺れ。一体何だつたのだろう。彼女はドアの前にうずくまつたまま考えていた。しかし、分からないうことが多すぎる。状況を考察するだけの情報も知識もない。魔術を勉強できれば最高なんだけど、アヤは一人ごちる。しかし、あの男はそこまで親切なんだろうか？後で謝りに行く時、とりあえず頼んでみよう。彼女は思った。

さらに一時間ほど経つた頃だらうか。ティイの声が聞こえ、ドアがノックされた。アヤが急いでドアを開けると、猫がするりと入ってきた。ティイは疲れたような顔をしていた。

「さつきのは何だつたの？」

アヤがそう尋ねると、ティイは暗い顔をして答えた。「査察官が、ちょっとねえ……それで旦那様が魔力を

「あの爆発がそれ？」

「そう。応接間がひどいことになつてしまつたわ」

「片付け、手伝おうか？」

「自動人形がもうやつているわ。大丈夫」

ティイはのびをすると、ふうっと息をついた。

「そういえば、査察官はもう帰つたのよね？あの人はどうしてるので？」

「？」

「それは……」

「僕に何か用？」

突然の声に顔を上げると、ドアから男が覗いていた。思いがけないことに、アヤは少し焦つた。

「ええと、その、『んにちは』

「『んにちは』」

部屋に入ってきた男は、薄気味悪いほどい口調と笑っていた。男は少しやつれたように見えた。

「それで、僕に何か用があるんだよね。ティイから聞いたんだけど」チラリと猫を見ると、なぜか申し訳なさそうな顔をしていた。アヤは思い切って言った。

「あの、この間は失礼なことを書いて申し訳ありませんでした」「そのことならもう良いよ。僕も感情的になってしまって悪かったね」

アヤはホッとして、頭を下げた。

「どうもありがとうございます」

「そこまで気にしなくて良いよ。君の状況を考えれば、あの位当然だ」

「いえ、命の恩人と言える方に、失礼な態度でした。……私はここで暮らしたいと思います。構いませんか？」

男は相変わらず笑っている。不気味なほどに。

「そう。良かった。もしかしたら出て行っちゃうんじゃないかなって心配してたんだ」

「そんなことはしません。お役に立てるか分かりませんが、どうぞよろしくお願いします」

「『んにちは』」

アヤから視線を外した男は、興味深そうに部屋を見回して言った。

「そうそう、足りない物とかあつたら言つてね。用意させるから。それで、他に用はない？僕もちょっと疲れていてね、もう帰つて良いかな」

「お忙しいのに、わざわざ来ていただいてすみません。……あの、一つお願いがあるのですが」

「何？」

「私に魔術を教えてくれませんか？」

「いいよ」

思い切って聞いた言葉に、あっさりと答えが返ってきて、アヤはかえつて困惑した。

「元々そのつもりだつたし。あと、文字も読めるように勉強してね。話す方は魔術でどうにでもなるけど、さすがに読み書きまでは難しくてね」

今更ながら、アヤは自分と男が話している不思議を認識した。世界が違うのだから、言葉が通じる訳がない。

「……魔術って便利ですね」

男は相変わらず笑つており、アヤを面白い物を見るよつに眺めていた。

「しばらく仕事で忙しいから、時間が出来たら少しずつ教えてあげよ。文字については、ティイに教わると良い」

「読み書きできるの！？」

思わず猫を見つめると、当然だと言わんばかりの顔をしていた。「じゃ、僕は戻るね。ティイ、よろしくね」

猫の返事を聞くと、男は身を翻してドアの方へ歩いて行った。ティイもその後ろについて行く。

「そうそう……一つだけ聞いても良い？」

振り返った男が言った。

「何ですか？」

「君のその冷静さは元々なの？それとも、生き人形になっちゃったせいなのかな？」

「は？」

「初めて会話した日、君はパニックもあつただろうが、かなり気が立つていた。しかし、僕の言葉をあっさり聞き入れて、自分が生き人形なんて訳の分からぬものにされてしまったことをすぐに受け入れてしまった。一昨日のことだつて、君はもつと怒つておかしくない。それなのに、自分がされた忌まわしいことより、むしろ僕の氣を害したことを気にしていた」

男の言わんとするところが分からず、アヤは黙つて男を見つめていた。

「僕は君の魂と身体を加工した。しかし、精神は触つていなし。」  
「正直いうとね、僕は目を覚ました君が発狂していくもおかしくないと思つていたんだ。だからティイに監視させていた」

「本当に、君は面白い被検体だよ」

男はそれだけ言い残して、猫とともに部屋を出て行つた。

部屋には、呆然とした顔の女だけが残された。

それから、一月が経つた。

この間、男は何やら忙しいらしく、ほとんど顔を見せなかつた。顔を合わせたのは三度、メンテナンスと称してアヤの体を診察した時だけだつた。施された魔術を調整し、より効率良く身体を動かせるように魔力の流れを微調整するのだという。この作業は、彼女の体力を飛躍的に上昇させた。彼女は一度目のメンテナンスの後から、男の指示もあつて、体を慣らし鍛えるためのラジオ体操と廊下のランニングを行つていだ。当初、半周するだけでめまいを起こし、気絶しまうほど体力を消耗したが（この時は廊下に倒れているところをティイを見つけ、急遽一度目のメンテナンスが行われた）、ほんの数日で、三周ほど走つてもその後一日中勉強して平然としているようになつた。三度目のメンテナンス後には、全力で十周走つても、まだあと十周は余裕で走れるくらいになつていた。

また、アヤはティイに読み書きの手ほどきを受けていた。この世界で使われているのは英語のような表音文字で、50個ほどの記号を組み合わせて音節を作るタイプの言語だつた。もちろん記号の形はアルファベットとは全く異なつていた。文字を覚えるより難しかつたのは、発音の習得だつた。ティイが言葉を発すると、それはアヤの耳には自動的に日本語に変換されてしまつ。しかし、この魔術の効果を止めてしまうと、二人の会話は全く成立しない。

ティイが男に相談したところ、一つ一つの文字の読み方と、音節の読み方を繰り返し復唱することから始めるという指示があつた。アヤが発音を一通り覚えると、ティイが音節をゆっくり読み上げた場合に限り、言葉が本来の音で聞こえるようになつた。アヤはティイが読み上げる簡単な文章を復唱しつつ、一つ一つの文字を書き写す作業をひたすら続けた。

後に男に尋ねたところ、アヤに施されたのはこちらの世界の言葉とアヤの基本言語を結びつけるような魔術だったらしい。全てのアルファベットを覚え、ある程度の発音が出来るようになると、アヤはその単語や文章が何を理解しているのか分かるようになつた。無論、アヤが知らない単語は自動的に変換はされない。例えば、この世界にしかいない動物の名前であるとか、魔術の専門用語などだ。向こうにもこれががあれば、英語でみんなに苦労しなくて良かつたのに。かつて、第二言語の習得に大変苦労したアヤであったが、今回はほんの数日で簡単な文章なら読み書きできるレベルに達していた。

夕方になり、ティイは部屋を去つた。夕焼けが差し込んで赤くなつた部屋の中では、アヤが鉛筆を走らせる音だけが響いていた。彼女の活動時間は、当初と比べて随分と長くなつていた。朝日と共に起き、日が沈んだら眠る生活。アヤは以前では考えられないほどの規則正しい生活を送つていた。夕日が陰り、部屋が薄闇に包まれ始めた頃になつて、ようやく彼女は机の前から離れた。

窓を閉めてしまつと、部屋の中はすっかり暗くなつてしまつた。しかし、今のアヤには闇の中でもはつきりと物が見える。彼女は暗闇が嫌いだった。闇の中には何がいるような気がして、その何かが語りかけてくるような気がして、夜も常夜灯の光がないと眠れなかつたくらいだ。しかし、彼女は暗闇に以前ほどの恐怖を感じなくなつていた。体の変化ほど明瞭ではないが、体と一緒に、心の方もよしやくまともになつてきたのかもしれない、アヤはそう感じていた。

彼女はもう食事をしない。食べなくても空腹感はないし、体も動く。アヤは眠気を感じてベッドに潜り込んだ。それは彼女に残された、唯一動物らしい欲求だった。

闇は、アヤの意識を自身の心へと向かわせた。アヤの心は不自然

なまでに落ち着いていた。ここへ来る前、精神的に不安定だったのが嘘のようだ。ここへ来た当初こそ、パニックを起こしたり、男の言葉にショックを受けたりして、感情の振れ幅が大きくなっていたが、今ではすっかり感情の揺れがなくなっていた。なぜだろう、やはり精神も何かいじられたんだろうか、彼女は少しだけ思った。しかし、もし仮に肉体と精神の両方を弄られていたとして、それが一体何だというのだろう。かりそめの生でも、必要としてくれるならできるだけのことをしよう。アヤは心からそう思っていた。

男が指摘したように、端から見ても、アヤは奇妙なほどこの異常な状況に順応していた。これには一つの理由があった。一つは彼女がこの世界に来る要因にもなった、元の世界に対する執着の薄さ、そしてもう一つはアヤの元々の性格だった。

因果が薄い、と男は言った。元の世界で、彼女は誰も求めなかつた。それはアヤが元々持っていた性格のためでもあるし、両親の死という突然の不幸と、信頼し尊敬していた相手からの裏切り行為の結果でもあつた。人を求めるのを完全に止めたら、やがて誰からも求められなくなつた。

ただ、昔から一人でいることを好んでいた彼女にとつて、それは悪い状況ではなかつた。しかし同時に、そう思うこと自体が異常なことであると、アヤは十分に理解していた。だから、かつてはそれを人に悟られないように努力していた。その結果が友人であり、恋人であり、仕事であつた。

しかし、両親が死んだ時、彼女はそのための努力が出来なくなつてしまつた。変わり者の娘を優しく受け入れてくれた両親の死は、彼女に予想以上のダメージを与えた。これまでの自分の努力が、結局は両親を安心させるためだけのものだつたことを悟り、ショックだつた。彼女は打ち込んでいたはずの仕事への情熱すら失い、同僚の信頼をなくした。結果、成果だけを取り上げられ、職場を追い出された。

彼女を心配した恋人や友人は、アヤを何とか励まそうとした。しかし、彼女にはそれすら耐え難かつた。突き放した恋人と友人はいつの間にか恋仲となつており、決まり悪そうに彼女の元を去つていった。

誰もいない、何もない生活は、彼女に安らぎを与えた。しかし、その毒は彼女の心身を少しずつ壊していく。アヤがそんな状態でも自殺を考えなかつたのは、「自殺は決してしない」という両親との幼い頃からの約束があつたからに過ぎない。

実のところ、彼女にとつて男は新しい親だったのかもしれない。彼女を作り替え、命をくれた男。例えそれがどんな目的からであれ、男はアヤを必要とし、居場所を提供してくれ、彼女が努力を続ける動機をくれた。

私の生は彼が支払つたコストと見合つただろうか。ふと、アヤは思った。

この間査察官が来たのは、魔力の大量消費について調べるためだつたという。大量の魔力は、アヤを助けるために使われた。ティイによれば、査察とは大変面倒なものらしい。そして、まだよく分からぬことが多いが、魔力とはそれなりに貴重なエネルギーであるようだ。そして、彼女の体の維持管理のため、男は自分の魂まで分け与えてくれたのだという。

何かを得るには当然、それ相応の代償が必要だ。彼女は心拍や呼吸、そして食べ物の消化能力も奪われたが、そんなもの、生き延びられたことに比べたら何てことはない。何があつても生きていれば良いことがある。アヤが心の中で反芻したそれは、彼女の両親が繰り返しアヤに語つた言葉だつた。

見ず知らずの私に、なぜ男はここまでしてくれたのだろ？ 裏には何か意図があるのは確実だ。でも、それは何だろ？

アヤが受け取つたのは身に余るほど恩寵だつた。一度終わつたはずの生、健康な体、……そこに宿る、健全（？）な精神。その幸

運がいかほどのモノかを想像し、アヤは身震いした。

それでも、この恩を返すためなら何だつてしよう。アヤは改めて誓う。問題は、ここ数ヶ月の一人生活で、人付き合いの仕方を忘れてしまったことだろうか。気さくな猫はともかく、神経質そうな男とうまくやつていくのは大変そうな気がした。

やがて、アヤは眠りに落ちた。彼女はもう、夢も見ない。

「……やつぱりダメです。また失敗ですね」

「正直、全くできないとは思えないんだけど……まあ、これは才能もあるから、気長にやるしかないかもね」

アヤは手に持った小さな枝を見つめた。何の変哲もないただの木の枝だ。持ったのと反対の手で、枝をそつとさする。男が教えてくれた式を呴きながら、目をつぶつて枝が鉄のように硬くなつた状態を強くイメージした。ふつ、と息をつき、目を開け、もう一度枝を確かめた。両手で端を握つて軽く力を入れると、枝はたわんであつさりと折れた。何の変哲もない、ただの木の枝だった。

「簡単な式だから、大抵の人にできると仰つてませんでした?」「言つた。ティイだつてこの程度あつさりこなす。でも、君にはできないうようだね」

はつきりと言つ男の言葉に、さすがのアヤもうなだれた。

言葉の習得も大分進み、アヤが簡単な本なら読めるようになつた頃、男の仕事も一段落ついたようだつた。男は時折暇をみては、アヤに魔術を教えてくれた。しかし、いくら練習しても、彼女は初步的な魔術すら使えなかつた。君には魔術の才能がないみたいだね。と男の評価は容赦がなかつた。

練習を終え、男は中庭でお茶を飲もうとアヤを誘つた。ついて行くと自動人形がすでにテーブルを整えていた。イスの一つには、ティイが座つていた。

二人と一匹でテーブルを囲む。男と中庭でお茶を飲むのは、あの一件以来初めてだつた。

「君が魔術を使えない理由の一つは、精神の弱さだと思つ」

男は用意されたパイを頬張りながら言つた。向かいに座つた男は相変わらず顔色が悪い。土氣色の顔でニヤニヤ笑うから、いつにも

増して不気味だつた。今日のお茶菓子はリンゴのよつた果物を使つたパイ。ティイも美味しそうに食べている。アヤの前にも一応置かれているが、彼女は食べる気にはならなかつた。

「どういう意味ですか？魔力の方に問題がある可能性だつてありますよ」

「そのままの意味だよ。魔術をコントロールするには強い意志とイメージ力が必要だ。それに、大体この場所で魔力が足りないことはあり得ない。だから、問題は君にある」

「感情が希薄なんです。だから魂が動かないんですよ」

「……」

男と猫は、本当に容赦がない。

男によれば、この城は魔力の特異点にあるという。魔力は常に空から降り注いでいるが、場所によつてはこの城のよう、集まる魔力の量が多くなるらしい。アヤや自動人形を動かす魔力は非常に膨大だ。自動人形はともかく、彼女の方は普通の場所では動くことができなくなるという。だから、アヤは城を出ることができない。もつとも、彼女にはそんな気は毛頭なかつたが。

「生き人形化の弊害の可能性もあるね。身体の方が人間離れしていくせいだ、精神の方までそれにつられたか」

「全く毎日バタバタを廊下を走り回つて。うるさいし迷惑ですよ」「お二人が構わないと言つたからやつてているんです。今更止めると言われましても」

アヤの身体能力は日々向上していくばかりだつた。今では廊下を全力で30周が彼女の日課になつており、さらに階段の上り下りを10セット追加していた。強くなつたのは脚力だけではない。腕力も明らかに強くなつていて、タンスやベッド程度なら一人で持ち上げて動かせるようになつていた。

「別に止める必要はないよ。どうせ僕ら以外、人なんていないんだから。それより、そこまで術がうまく行くとは思つていなかつたよ。こちらとしては嬉しい誤算だ。全く健康でうらやましい限りだよ」

男はのんびりとお茶を飲み干した。

「体調、まだあまりよろしくないんですか？」

「『』のところ忙しかったしね。まあ、倒れない程度には休んでるんだけ。ティイがうるさいし

「旦那様の下僕として、当然のことですわ。それをそんな風に言われるなんて！」

『』の少し前、男は一度倒れた。原因は極度の睡眠不足。図書室で突然気を失い、そのまま一日ほど眠り続けたという。その間、ティイは男につきつきりで、ずっと男を見守っていた。アヤも手伝おうと部屋に行つたが、ティイに追い出され、結局何もできなかつた。使い魔とは、生き物を生きた状態のまま加工して作る物らしい。こめる魂も、もちろんその生き物のオリジナルを使用する。ただ、そのままだと知能が足りず何もできなかつたり、言つことを聞かなかつたりするのだそうだ。だから、脳を肥大化させ知能を高める処置を施すと同時に、魂自体を改良して作成者の命令を遂行できるだけの精神が発生するようにするという。ティイは優秀な魔術師である男の使い魔であるだけあって、命令を完全にこなすだけの知性と忠誠心、さらに簡単な魔術まで使えるという。この話を聞いた時、いくら魔術に向いてないとはいえ、猫に負けるなんてと、アヤは心中で呟いた。

「結構おせっかいですね、ティイは」

アヤの言葉に、男もうなずいた。猫はキーッと毛並みを逆立てた。

翌日、朝からアヤの部屋を尋ねて來た。今日は空間制御の魔術をつかうから、見に来いといつ誘いだった。アヤは喜んでその誘いを受けた。

魔術には主に物質操作と空間操作の一種類があるという。ただ、空間制御はそれなりに経験を積んだ魔術師にしか許されていないらしい。また、やはり大量の魔力を消費するために使える場所は限られており、その行使には最高の技量と経験が求められる。そのため

が、アヤをこちらに運ぶ際に使用したような、異世界との間をつなぐような魔術は禁術とされているといふ。

「ここだよ」

アヤは城の地下室に案内された。部屋の中は意外と明るく、本のたくさん詰まつた本棚と机の他にはほとんど物がなかつた。一番奥の壁には、魔術に使うのであるつ何か模様が描かれていた。部屋にはティイがいて、いそいそと準備を行つていた。

「旦那様、準備は整つております」

ティイの言葉に男は頷くと、奥の壁の前に立つた。

「じゃあ、始めるよ。アヤはできるだけ離れてこるよ」

「はい」

「ティイ、サポートよひじへ

「心得ております」

男は壁に手を当て、何か呟き始めた。

魔方陣のような模様が描かれている以外は何の変哲もない壁に、突如町並みが映り込んだ。それはマーケットのような場所で、沢山の人で賑わっていた。自動人形らしきものが荷物を運んでいる様子も見える。

「……他にもちゃんと人がいるんですね」

アヤが思わず呟くと、ティイが聞いた。

「どういう意味、それ」

「え、いや、城の外にはちゃんと人間社会が存在するんだなと……」  
部屋の壁に外部の映像が映り込む様子は、プロジェクターでスクリーンに動画を投影している様子と似ていた。ふと、アヤは職場の会議室を思い出した。

「術にはあまり驚かないのね」

ティイがアヤに尋ねた。少し不満そうな顔をしていた。

「これ、ライブ中継なの?」

「らいぶちゅうけいつて何だい?」

男が口を挟んだ。アヤとティイや男の会話は、時折言葉の意味を巡つて止まる。大方の言葉はアヤに施された魔術によつて自動翻訳されるが、時折片方には語彙が会話に出ると、その意味の説明が必要であった。

「ええと、現在の状態をそのまま別の場所に映し出す」と、ですかね

「そうじゃない場合があるの?」

「映像を予め記録して、それを映すんです。こっちの方が普通でしたね」

「君の世界には映像を映す機械があつたんだっけか。こんな感じかい?」

「はい、ちょっと似てます」

アヤがその映像を見ていると、時折、画面に突然人影が現れることに気づいた。

「これ、何ですか？その場に人が突然現れているように見えるんですけど」

「そうだよ。ここから向こうに行けるんだ」

男によれば、この壁は壁に映っている映像の場所にある別の陣とつながっているらしい。文字通り、スクリーンの向こう側に行けるのだという。ただし、今回陣をつないだ場所は公共の陣で、一方通行しか出来ないらしい。陣は大きな町には大抵存在し、帰りは自分の町へとつながっている陣を利用するという。

「ここからも行けるんですか？」

「行けるよ。ただ、町からここへの陣がないから帰つてこられないけどね……あ、来た」

ふと画面を見ると、中年の女が画面の前に立っていた。恰幅の良い、商人風の女だった。女はこちらを見て軽く手を振っている。気がつくと、部屋の中に灰色のフードを着た自動人形がいた。男は人形を呼びつけると何やら命令をして、小さなバッグを人形に持たせた。人形は壁に近づくと、そのまま壁の中に飲み込まれるようにして消えていった。人形の後ろ姿は、そのまま、画面に映し出された。「すごい……」

その光景にアヤは思わず呟いた。

人形は女の元に歩み寄ると、先ほどのバッグを手渡した。中身を確認した女はこちらに向かって頷くと、そのまま人形を連れて画面から消えてしまった。

「お使いですか？」

「ああ、彼女はなじみの商人だ。たまにこうして食料品や生活用品を調達している」

「ご自分では行かないのですか？たまには外出も良いと思いますが」アヤの何気ない質問に、一瞬、ティイが緊張したのが見えた。何かマズいことを言つてしまつたかもしれない。アヤは微かに緊張し

て、男の返事を待つた。しかし、男の反応は普通だった。

「……僕は体が良くないから、すぐ疲れてしまってね。こういう人が多いところは苦手なんだよ」

「そうでしたか」

ティイがホッとしているのを感じて、アヤも内心安堵した。とりあえず、この件は聞くのを止めよう。アヤはそう思った。

「帰りはどうするんですか？」

アヤは話を変えようと男に尋ねた。

「そのための陣を渡してあるんだ。時間になつたらつなげことにつてる」

「なるほど……」

「時間はもう少し先だ。見たいかい？」

「はい」

「そうか。悪いがこれから別の仕事をする。また呼びに行くから、部屋に戻つてくれ」

「分かりました、失礼します」

アヤは素直に部屋へ戻つた。

部屋に戻つたアヤは、暇つぶしに部屋の掃除を始めた。ここに来た当初は家具と日用品以外はない殺風景な部屋だつたが、最近では勉強用にと借りた本や資料の類が増えてきていた。机の上に積み上げられた本を整理しながら、アヤはふと先ほどの会話を思い出した。

男やティイが、まだアヤに教えてくれないことがいくつかあつた。一つは城に他に人がいない理由だ。以前アヤが尋ねた際には、この土地には魔力が多くて、人が住むのにはあまり適していないということしか教えてくれなかつた。確かに、窓から眺める周辺の土地はやせ衰えて耕作には向かなそうに見えた。しかし、大量の魔力は貴重なはずで、魔術師ならばここに研究拠点を構えたいと思うのではないか。それなのに、この城には男とアヤと猫、そして数体の人

形しかいない。部屋は何部屋も空いているのに、そのほとんどには使われた形跡すらない。

そして、一番の謎は男のことだった。実は、アヤはまだ男の名前を知らない。尋ねても、もう知っているはずだから思い出してねとニヤニヤと笑うだけだった。覚えがないと言つても、そのうちに思い出してくれれば良いからと返されてしまう。ならばとアヤはティイに尋ねたが、すでに口止めされた後だった。男の素性はもつと分からぬ。禁術という、どう考へても一般向けではなさそうなものの資料を大量所持している理由も、生活費や研究費をどう得ているかすら謎だ。また、多すぎる魔力が体に良くないのであれば、男やティイにも何かしら影響があるはずだ。特に男は、体が弱いと常日頃言つている。この魔力が男の体に悪影響を与えているのではないかとアヤは密かに疑つているが、僕は大丈夫という返事だけで、まともに答えてはもらえなかつた。

折に触れて尋ねてはいるが、男もティイもこれらの質問には回答する気がないらしい。いつも適当に濁されるのが常だつた。下手に聞き出そうとすれば、先ほどのように男の機嫌を損ねてしまう恐れもあつた。いつか、私を信頼してくれれば話してくれるんだろうか。アヤは密かに期待していた。

本を並べ、筆記用具を整理すると、机の上は見違えるほどきれいになつた。アヤは仕上がりに満足して、窓際のイスに座つた。

窓からは草原が見えた。明るい日差しに照らされて、丈の短い草がそよそよと風に揺れている。ただ、冷静になつて考えてみると、それはいくらか奇妙な光景だつた。まず、生き物の影が見えない。時折鳥が飛んでいるのは見かけるが、アヤは野生動物の類を見かけたことがない。一度、奇妙な獣を見ただけだつた。草が生えているのにそれを食べるものはいない。また、旅人や通行人の類が通ることもない。

アヤがこちらに来てから、男以外の人間を見たのは先ほどの魔術

による映像が初めてだった。男はアヤの存在を隠したいようだった。以前、査察官とやらが来た時は、アヤが部屋の外に出ないようになもティイも神経を尖らせていた。単に秘術を行つたことがバレるのがマズいのか、それとも別に理由があるのか。例えば、男の評判の問題だ。猫と暮らす孤独な魔術師が、女を生き人形にして側に置いている……。このシチュエーションは確かに怪しい。別にそういう関係でなくとも、人々は勝手なことを言うだろう。アヤは窓からの景色を見ながら、そんなことをぼんやりと考えていた。窓から入る乾いた風が気持ちよかつた。

気がつくと、彼女は座つたままウトウトと眠つていた。そこに猫がやって来て、真つ昼間から何を油を売つていて!とアヤを叩き起こした。いつの間にか時間が来ていたのだ。ブツブツ言う猫を宥め、窓を閉めようと立ち上がったアヤは、ふと草原に何かがいるのを見つけた。

いつか見た、あの獣だった。じつと座つて、じあらを見つめていた。

いつから見られていた?アヤはその視線に少し悪寒を感じて、ティイに言おうかと迷つた。しかし、なかなか部屋から出ようとしない彼女に痺れを切らしたティイが叫んだので、アヤはそのまま窓を閉め、急いで部屋を出た。

もう時間なんだから余計な手間をかけさせないと、ティイは走りながらもまだブツブツと言つていた。アヤはその後ろ姿を追いながらも、悪い予感がするのを振り払えずにいた。

「これは図書室。」つちはそこに積んでおいて」

「はい」

アヤは重い木箱をせつせと運んでいた。アヤとティイが地下室に行くと、先ほどは町を映していた壁に、どこかの家の部屋が映し出されていた。部屋には山のような物資が積まれてあり、聞けばそれは今回買い付けた品だという。灰色ローブの自動人形が壁を行ったり来たりして、地下室に荷物を移動させていた。地下室には他の白いローブの人形と黒いローブの人形も来ていて、食料と思しき大きな布袋を台車に乗せて運んでいた。男とティイはといえば、イスに座つてアヤと人形たちに指示を出すだけだった。

「『』苦労。手伝ってくれて助かつたよ」

本が大量に詰まつた木箱を運び終え、地下室に戻つてきたアヤに、男が声をかけた。いくら体力が人並み外れてきたとはい、五十キロはあるうかという木箱を持ち、階段を上り、図書室へと運ぶ作業を三往復もさせられては、さすがのアヤもくたくただつた。

「体力馬鹿もたまには役に立ちますわね」

ティイの嫌味が聞こえたが、座り込んだアヤには反論する気力もなかつた。

「リストのチェックは?」

「問題ありません。全て揃っていますわ」

「それでも、ちょっと買い過ぎちゃつたかな」

「三ヶ月は持ちますわね」

男とティイが会話をしていたので、アヤは何も言わず部屋に戻ろうと立ち上がつた。それを男が目に留めた。

「あ、その箱、君のだから持つて行って良いよ

男は部屋の片隅に置かれた一つの箱を指した。

「私のですか？」

アヤが訝しげに聞き返すと、男はニヤリと笑つて言つ。

「服と下着だ」

箱を持つて自室に戻ると、アヤは早速箱を開けた。中身は確かに文物らしい鮮やかな色使いの服だった。これまでアヤは男とほぼ同じ、シャツとズボンに上着という少々だらしない格好をしていた。それは色味のない質素なものだった。取り出して当ててみると、胸元が大きく開いていたり、体のラインがピタリと出るようなデザインだったり、あまりアヤの好みではなかつた。服くらい自分で買に行けば良いんだけど、とアヤは思つ。しかし、男なりに気を遣つてくれたのだろうと思い、少し嬉しくもあつた。

その夜のことだった。アヤはふと、城の中でかすかな足音がするのに気がついて目を覚ました。その音はとても小さく、常人では聞き取れなかつただろう。その足音は明らかに男の物でも人形たちの物でもなく、当然ティイのものでもなかつた。アヤは不審に思い、ドア越しにそつと様子をうかがつた。

足音の主は少なくとも一人いた。同じフロアの廊下に一人、下の回廊にも恐らく一人。さすがに細かい場所までは分からなかつたが、あちこち歩き回つて、何かを探しているような感じがした。

泥棒だらうか？アヤは音がしないように用心しながらドアに鍵をかけた。武器になるようなものもなかつたので、近くにあつたほうきを手に取つて、万が一に備えた。

男やティイは気づいていないのだろうか？男はともかく、猫であるティイは気づいている可能性がある。アヤはどうにか一人にこの状況を伝えたかったが、方法を思いつかなかつた。そういえば、ふとアヤは男が自分の心を読めると以前言つていたのを思い出した。ただ、この件に関しては男のはつたりか、あるいは読めると言つて

も感情の流れが読めるだけなのではないかとアヤは踏んでいた。そのくらい、男はアヤの感情に鈍感だった。

ダメ元でアヤは精神を集中させ、心の中で男に呼びかけてみた。誰かが城の中にはいる、と。せめて私の危機感だけでも伝われば良いんだけど、とアヤは思った。

その時、アヤは足音の一つが自分の部屋に近づいているのに気づいた。とつたに洗面台のある小部屋の影に身を隠し、音を立てないように動きを止めた。ほつきを握る手に自然と力がこもる。足音が過ぎ去ってくれるのを祈りながら、近づいてくる足音に耳を澄ませた。

足音は、アヤの部屋の前で止まつた。ドアノブを回すが、鍵がかかっているので開かない。ほつきを握りしめるアヤの額に、汗が流れ落ちた。微かにカチヤカチヤという、金属のふれ合つ音が聞こえた。

鍵の開く小さな音が、部屋中に響いた。

ドアが開けられ、部屋の中に入影が滑り込んできた。少しだけ開けた小部屋のドアから、アヤは様子を窺つた。人影の持つ小さなランタンが部屋を薄く照らしている。人影は大柄な男のように見える。影は乱れたベッドに近づいた。

賊がアヤに気がつくまで、そう時間はかかるだらう。アヤのいる小部屋には隠れる場所などない。賊が小部屋に入つてきたら終わりだ。そつと部屋の方を伺いながら、アヤはこれからどうすべきかを必死に考えていた。

手にあるのはほつきが一つ。武器になるよつなものなどない。体力だけならあつても武術の経験など皆無のアヤに、戦うという選択肢は最初からなかつた。いかに逃げるかが問題だつた。小部屋に閉じこもつて籠城するか、あるいは賊が気がつく前に廊下に出て、逃げながら助けを呼ぶか。

逡巡しているうちに、影が振り返つてアヤのいる方を照らした。そして、それは彼女に気づいた。

マズい！とアヤはドアを閉め、渾身の力でドアを押さえた。男はドアに駆け寄り、無理矢理開けようとした。

「開けろ！大人しくすれば命までは取らない！開けろ！」

賊の怒鳴り声が聞こえた。ドアがもの凄い力で引かれる。アヤは内心震え上がつたが、体中の力を振り絞つて何とかドアを押さえた。「誰か！誰か助けて！」

ドアを押さえながらアヤは叫んだ。

「！見つけたぞ！の方を見つけた！おい！」

賊は仲間を呼んだようだつた。部屋の外から足音が聞こえた。こちらに向かつている。アヤは泣きながらドアノブを必死に押さえた。「アヤ！大丈夫！？」

ふいにティイの声が聞こえ、ギャツという悲鳴が聞こえた。ドア

を開けようとする力が消えた。

「何しやがる！この！」

ドアを開けると、自動人形が男にのし掛かって押さえつけているのが見えた。

「アヤ、逃げるわよ！」

ティイの声にはつとして、アヤは小部屋を飛び出して、猫と共に走り出した。

「怪我はない？」

「大丈夫。それよりあれは？これからどうするの？」

「まずは地下室へ。旦那様もそこにいるわ」

ふと後ろを向くと、アヤの部屋から賊が出てくるのが見えた。男は大声を上げて、二人を追ってきた。

階段を駆け下り、回廊を抜け、中庭に差し掛かったところでもう一人の賊に出くわした。賊は一瞬驚いた顔をしたが、ナイフを構え、道をふさごうとした。

「このまま行くわよ！」

立ち止まろうとしたアヤを制して叫ぶと、ティイは賊の顔めがけて飛びかかった。鋭い爪で顔を抉られ、男はナイフをメチャクチャに振つて猫を追い払おうとする。猫は男をあざ笑うかのように飛び跳ねて、もう一度顔を狙つて攻撃した。賊はナイフを落とし、顔を押さえて悲鳴を上げた。

地面に戻ったティイは一瞬アヤを見た。アヤは軽く頷いて、勢いつけて男にぶつかった。男は廊下に倒れ込んで、のたうち回った。アヤはナイフを拾つて、地下室へとつながる階段へとひたすら走つた。

地下室への階段を走り、地下室まであと少しという場所まで來た。その時、不意にティイが止まつた。よく見ると、前方に獸がいるのが見えた。瞬間、窓からアヤを見つめていた獸だった。

「……使い魔ね」

賊の仲間だつたのか！アヤは驚き、男やティイに獸について伝えなかつたことを後悔した。背後からは先ほどの連中が追つてきているのが分かつた。小さな声で猫が言った。

「私が何とかするから、先に部屋へ。入つたらドアを閉めて「でも」

「私なら大丈夫ですから。旦那様の元へ、早く。」

その時、獸の背後から人形が飛びついた。

「こつちだ！早く来い！」

突然、男の声が聞こえた。獸は奇襲にひるんでいた。ティイはその隙を見逃さず、獸に飛びかかった。人形とティイと獸はもみ合つて、転がつた。獸の巨体が近くにあつた部屋の木製のドアを破り、その中へと転がり込んだ。

「アヤ！こつちだ、早く来い！」

男が叫ぶ。

「旦那様を頼みますよ！」

一瞬ためらつたアヤだつたが、背後から迫る足音とティイの言葉に再び走り出した。

部屋の横を通り、アヤは獸がティイの喉笛を引き裂くのを見た。ティイはアヤを見つめていた。

アヤは叫び声を上げて、逃げることしかできなかつた。

## 賊

男とアヤは何とか地下室へ逃げ込んだ。足音が迫る。アヤは扉を閉ざして鍵を掛けた。

「どうしたら！」

扉にぶつかる複数の音。追いついた賊と獣が、扉を開けようとしているのだ。

「そんなに焦らなくて大丈夫だよ。時間は僕らの味方だし、彼らは確実に報いを受けるから」

焦るアヤと対照的に、男は落ち着いていた。

「問題ない。彼らは僕には手を出せない……絶対に」

男は咳くように言つと、アヤに明かりをつけるよう指示した。部屋の中は暗く、男の持つランタンだけが唯一の明かりだった。部屋の奥に向かい明かりをつけたところで、アヤはふいに肩をつかまれ、後ろに引っ張られた。

「扉を開ける」

野太い男の声が部屋に響き、男も振り返つた。アヤは賊に後ろから抱きすくめられ、首筋に剣を押し当てられていた。

「武器を捨てろ」

賊はアヤにナイフを捨てるよう指示した。アヤは仕方なくナイフを足下に落とした。賊はアヤの首を触り脈を確かめた後、彼女の体をまさぐつた。アヤは嫌悪感に身を震わせた。

「なるほど、良くできているな」

「それが目的？兄さん。どこの盗賊かと思ったよ」

男が尋ねる。男は奇妙なほど冷静で、表情もいつもと変わらなかつた。

「お前がさつさと渡さないからこいつこいつになる」

アヤは自分を捕まえている男を見上げた。髪の色や瞳の色は違つたが、確かに一人の顔は似ているように見えた。しかし、賊は筋肉

質でたくましく、もやしのような男とは正反対の体格をしていた。

「……大したものだ。生きた人間と遜色ない」

「生き人形なんだから当然だろ」

男は小馬鹿にしたような顔をして笑っていた。

「完成したのならなぜ渡さない？父も怒つているぞ」

「完成品じゃないからさ」

「これだけでも十分な成果だ。王に献上すればお喜びになるだろ」

「賊はアヤをなめるように眺めた。

「だから、それはあんたらが思つてるようなモノじゃない。大体、ここから連れ出したらすぐに壊れちゃうよ」

「『箱』に入れれば持ち運びも保管も出来るだろ。本当は動いているところをお見せしたいが、とりあえずはこれで十分だ。この試作品を研究すれば、魔力が少なくとも動く生き人形が作れるようになるだろ」

こいつは私を完全にモノと思っている！アヤはぞつとした。研究対象として連れて行かれたら、何をされるか分からぬ。何とか逃げないと、アヤは焦つた。

「持つて行つても構わないけど、それ、研究の役には立たないと思うよ」

アヤの心を知つてか知らずか、男は「一ヤ一ヤ笑いながら一人を見ていた。この人もあるてにはできない。アヤは思つた。

「なぜだ？」

「だつてそれ、人間じゃないし」

「何を言つてる！どう見たつて人間じゃないか！」

賊はイライラしたように怒鳴つた。

「全くお前という奴は！誰のおかげで禁術の研究や、まともな生活ができていると思つてる！」

「少なくともあんたのおかげじゃないね」

「ふざけるな！」の恩知らずが。もういい、とつととその扉を開けろー！」

吐き捨てるような賊の言葉に、男は大げさに肩をすくめて見せた。  
そして何も言わずに扉を開けた。

扉から一人の男と獣が入ってきた。

「分かつてるとと思うが、そいつには触るな。連れて行くのは女だけだ

男達はうなづくと、アヤを取り囲んだ。

## 戦い

侵入者たちはアヤに武器を突きつけ、近くにあつた大きな箱に入るように指示した。アヤは渋々それに従つた。顔を血まみれにした男が、もたもたするアヤをこづいて急かした。恐らくティイにやられた男だろう。

男はそれをただ眺めていた。アヤはそんな男の態度に失望しつつ、何とか逃げられないか思案していた。しかし、どうしたらいか分からなかつた。

アヤが箱に入り、男たちがいよいよ蓋を閉めようとした瞬間、不意に男が口を開いた。

「……よく確かめずに事を進めようとするの、兄さんの悪い癖だよ」侵入者らは手を止め、男を見つめた。男の兄だという大男が答えた。

「何を？？つ！」

突然、ビュツという何かが風を切る音がして、部屋の中は男たちと獣の悲鳴で満たされた。ぐちよりという肉のつぶれる音、大きな物が壁に当たる音、何かが碎かれるような音が部屋中に響いた。

断末魔と恐ろしい音に包まれ、アヤは箱の中で恐怖に身をすくませていた。時折箱の上を何かが飛んでいくのが見えた。生臭い匂いが広がり、箱の中にも生暖かいしづくが無数に飛んできた。それは血だつた。

やがて部屋は静かになつた。アヤは箱からそつと顔を出した。

部屋は血と肉片の海と化していた。床も壁も恐ろしい量の血で塗られ、体中に穴の空いた肉塊が三つ転がっていた。

「アヤ、大丈夫か？」

突然声をかけられ、アヤは凍り付いた。吐き気と恐怖を必死で押

さえながら振り向くと、そこには男とその兄がいた。兄の方は緑色の紐でグルグル巻きにされ、半ば宙づりになっていた。顔は引きつり、目を見開いて、恐怖に喘いでいた。

よく見ると、その緑色の紐はぬめぬめと光り、蠢いていた。アヤは見てはいけないと思いつつ、紐を目で辿った。

扉の前に、何かが居た。それは体中から細い触手を大量に生やした、四つ足の動物だった。顔とおぼしき部分はうねうねと動く短い触手に隠されていたが、そこから覗く金色の目は強い怒りを示していた。口元には大きく尖った牙が、前足には鋭く尖った鉤爪が光っている。男を縛り付けているのは背中から伸びている触手で、その後ろには羽のようなものが見えた。

ひつ、つとアヤは息を飲んだ。彼女の口元は小刻みに震え、歯がぶつかってカタカタと音を立てた。その奇妙であまりに恐ろしい姿に、アヤは気が遠くなるのを感じた。

「大丈夫？」

男の声にアヤははつと振り向いた。男は血にまみれてニヤニヤと笑っている。こつちも正気じゃない。アヤは逃げ出したい気持ちで一杯だつたが、足が震えて立つことすらままなかつた。

「おまえ、こんなことをしてただで済むと思ってるのか！？」

宙づりの男が突然喚いた。男は暴れ、触手から逃げようともがいていた。しかし、触手は更に強く男を締め上げた。うつと呻いて、大男は目の前にいる自分の弟をにらみ付けた。

「すまないね、兄さん。でもそっちが乱暴なことをするからさ。テイイは怒ると手がつけられなくてね」

白々しく笑う男に、宙づりの男が目を剥いた。

「わざとらしい真似を……」

「悪いけど、今日はお引き取り願えるかな？彼女については、後日責任を持ってレポートを送るからさ」

「現品がなければ意味がない！」

「さつきも言つたけど、彼女はこの世界の人間じゃない。かなりの

無理をして作った僕の苦心の作だ。魔力をひたすらに消費するだけの、この場所以外では無用の長物を」

「何を言つてゐる…」

「兄さんやこいつらがこの城に入れるようになったのは彼女のせいだよ。監察官の連中も勘違いしてたけど、彼女の作成で大量に魔力を使つたからこの周辺の魔力濃度が下がつた訳じやない。彼女は存在するだけで大量の魔力を消費してしまうんだ。だから、なかなか濃度が戻らないんだよ」

「それでは使い物にならないじやないか！」

縛られた男が喚く。見上げた男は嘲笑の笑みを浮かべ、さつきもそう言つただろうとにべもなく言つた。

「下ろしてやるから、大人しく帰つてくれないか……ティイ」

男がドアの前の化け物に声をかけると、それは少しためらつてから宙づりの男を解放した。解放され、床に投げ出された大男は、そのまましばらくうなだれて座り込んでいた。

アヤは意を決してドアの方を振り向いた。怪物は背中の触手を遊ばせるように空中でうねうねさせて、兄弟の様子を見守つていた。その目にはまだ怒りが含まれていたが、先ほどより落ち着いているように見えた。

「ティイ、なの……？」

アヤは震える声で化け物に尋ねた。化け物の目がアヤを捉えた。

「……………」

「……………」

いつもより少し低かっただが、それは明らかにティイの声だつた。しかし、それはなぜか悲しげな響きだつた。そして、うなだれている様にも思えた。怪物はしばしアヤを見つめていたが、やがて立ち上がり、這いざるように背を向けて静かに廊下へと消えた。

何とも言い難い気持ちに襲われていたが、アヤの心は何か動ける程度まで落ち着いていた。アヤは箱を出て、少し離れたところから男とその兄の様子を眺めた。

大男は座り込んだまま、動こうとしなかつた。顔を伏せているため、その表情は分からなかつたが、何かブツブツと独り言を言つてゐた。それは弟への怨嗟の言葉だつた。

「兄さん、お疲れのところ悪いけど、早く帰つた方が良い。このままここにいるとマズい。分かつてゐるだろ？」

男は兄に声をかけた。座り込んだ大男はその声に反応してゆつくりと顔を上げた。その顔は怒りに染まつてゐた。男の視線の先には先ほどアヤが落としたナイフがあつた。

マズい、アヤは反射的にそう思い、二人の方へ飛び出した。ほとんど同時に、座り込んでいた男はナイフを掴み、自分の弟に躍りかかつていた。

アヤは襲われた男を庇つように突き飛ばした。襲つてきた男のナイフはアヤの左腕に突き刺さり、肉を引き裂いた。

「アヤ！」

突き飛ばされ、床に転んだ男が叫んだ。アヤの腕からは生ぬるい血が噴き出し、焼け付くような強烈な痛みが彼女を襲つた。失血のせいか、彼女の視界は少し歪んだ。

「やめろ！」

男の声が響いた。目の前の大男はナイフを振りかざして更に攻撃を続けようとしていた。アヤは痛みで気を失いそうだつたが、大声を上げて襲いかかる男の腹にタックルした。男は吹つ飛び壁にぶつかった。アヤはそのまま男を押さえつけた。

うおーとうなり声を上げながら男は暴れ、アヤの背中を刺した。

アヤは背中の痛みに悲鳴を上げた。男を押さえる力が緩み、その隙に男はアヤを突き飛ばし、床に押さえつけて馬乗りになつた。

「ふざけるな！」

男の顔は憎しみに歪んでおり、凄まじい形相でアヤを睨み付けた。男は血まみれのナイフを振り上げて、彼女の胸を刺した。アヤはとつさに男の腕を掴み、膝で男の下腹部を蹴り上げた。男は痛みに悲鳴を上げ、力を緩めた。その隙に、彼女はナイフを抜いて奪い取つ

た。

「「Jの野郎！」

男はアヤからナイフを奪おうと彼女の腕を押さえつけようとした。しかし、一瞬早く、彼女は奪ったナイフで男の目を刺した。

「ぎやあああ

目を刺された男は顔を押さえてのけぞつた。

「アヤ！」

ティイの声がした。触手が空を切り、男を再び壁にぶつけた。そして、そのまま絶叫する男を縛り上げた。アヤは男やティイのいるところまで、這つて逃げた。

「離せ、離せええ！！」

捕らえられた男は狂ったように叫び続いている。その光景はあまりに恐ろしいのに、アヤは目を離すことができなかつた。狂つている、アヤは思つた。

その時だつた、宙づりになり絶叫している男の体に変化が起きた。ぶら下がつてゐる足がだらりと伸び、ぐによぐによとあり得ない場所で折れ曲がつた。縛り上げられている胴体が急に柔らかくなり、ゼリーのようにつぶれた。

「……手遅れだ」

男が呟いた。傍らの男は静かに兄を見つめていた。

「あはははははははは」

絶叫はいつの間にか笑い声に変化してゐた。顔にナイフを刺したまま、男はゲラゲラと笑つてゐる。

「……ティイ」

男の指示で、ティイは一度触手を緩めた。床に落ちたそれは、不定型な肉の塊だつた。アヤは吐き気を覚え、口を押さえた。

肉塊の顔はまだ笑い続けている。触手はそれを床に拘束した。男が立ち上がり、床に縛り付けられたそれに歩み寄つた。

「「Jめんよ、兄さん」

一言だけ呟いて、男は肉塊に触れた。

肉塊は次第に膨れあがり、巨大な水風船のようになつた。笑い声はまだ聞こえていた。やがてビチャツという音と共に、しほむようにそれはつぶれた。笑い声は消えた。

倒れているアヤの足下にも、どろどろした液体が流れてきた。生ぬるいゲルが彼女の体を汚していった。その色は赤かつた。顔を上げると、アヤは男と目があつた。彼もまた血まみれだつた。男の表情を見て、アヤは背筋が凍り付いた。男は笑つていた。

アヤは悲鳴を上げて、氣を失つた。

気がついたら、真っ暗な水の中いた。

アヤはもがいた。

体は思つように動かず、息も出来ない。

「死にたくない？」

どこからか男の声が聞こえた。それはアヤの知つている声だった。

「死にたくない」

アヤはは答えた。

「何を失つても？」

「いいよ。何を失つても」

アヤは答えた。

「ならば、この手を取るんだ」

アヤは何も答えなかつた。

気がつくと、アヤは寺にいた。そこでは両親の葬儀が行われていた。

「生きたいとは、思わない？」

目の前に、男が立つていた。

「生きたいよ。でも、お父さんもお母さんももういない」

喪服を着たアヤからは九つの影が伸びていた。その影の一つがアヤに代わつて答えた。

「どうして自分のことなのに、親のことが出でくるのさ？」

「誰かに必要とされなければ、私は生きる意志を継続できなかつた」

別の影が囁く。

「友人や恋人だつていたんだろ？」

男の質問に、影たちが口々に呟く。

「私は家族以外、誰も好きになれなかつた」

「家族だつて本当は好きだつたのか分からぬ」

突然、風景が変わつた。そこはアヤの通つていた大学の校舎だつた。窓の外に、昔のアヤ、友人、そして恋人が仲良く連れ立つてゐる後ろ姿が見えた。

「あの人のことだつて、本当はどうでも良かつた」

「彼は女らしい私が好きだと書いてくれた。でも、そんな風に褒められたつて気持ち悪いだけで、あれだつて、いつも早く終わればいいつて思つてた」

「そうだよな。子供なんていらないし」

そう呟いた二つの影は、なぜか他の影より色が薄かつた。

また景色が変化した。かつて勤めていた会社だつた。

「社会の中で実績を積み、評価されればこの息苦しさは軽減するつて思つてた」

「他のものは全部捨てて仕事に打ち込んだ」

「でも、努力が認められても、どんな良い評価を受けても、ちつとも嬉しくなかつた」

「お金だけは、残つて良かつたけどね」

他の影の声とは異なり、最後の声だけが少し明るい調子だつた。

かつて家族と共に暮らした家。両親と共に燃えてしまつた家の中に、アヤはいた。

「両親がいなくなつて、初めて気がついた」

「私は両親に自分の生存する意志まで依存していた」

「他の人は代わりにはならなかつた」

「仕事もね」

「宗教もそう。ああいうのには関わり合いたくなかった」

「そのうち人と関わることもできなくなつて、閉じこもつた」

「人と関わるために使つてたエネルギーも、結局は同じところから

来ていたからね

影は口々に言つ。

「でも、引きこもりニート生活もそう悪くなかったよ

影の一つがケタケタと笑つた。

景色が変わる。そこはそれまでとは違つ世界の、あの奇妙な城の中庭だつた。

「ここで、何を思つて生きていたの？」

男はベンチに座つていた。アヤはその目の前に立つていた。

「あなたの役に立ちたいと」

影がぼそりと言つた。なぜか影は六つになつっていた。

「役に立てると思つていた。でも、それは私の勘違いだつた」

どうして?と男が尋ねた。

「あなたは、私と同じで、他人を必要としないから

「血まみれで笑つているあなたを見て確信した」

「でも、私と違つて、他者に依存しないから」

影たちの言葉に、男は矛盾してないかと笑つた。

「あなたは元々他人を必要としないし、自分が生きる理由を他者に預けたりもしない」

「でも私は違う。他者を拒絶しているのに、自分の一番根幹のところで、他者を必要としている」

「存在するのに、理由がいるのか?」

男はアヤに尋ねた。

「いらないの?」

アヤ自身が尋ねた。

「僕は、いらない。他人がどう思おうが関係ない。自分の命の価値なんて、自分だけが知つていればそれでいい」

アヤは何も言えなかつた。影たちも黙つている。

「君は生きたい?」

「生きたい」

アヤは口を開いた。

「なぜ？僕は別に君を必要としないよ」

アヤは俯いて唇を噛んだ。

「望むなら君に命をあげよう。でも、僕を存在理由にするな。それができないなら大人しく死んでくれ」

アヤは苦笑した。

「ひどい人。でも、何で私のためにここまでしてくれるの？」

「実は大した意味はないんだ。ただの気まぐれだけでもないんだけどね。まあ、変なところに連れてきて、無理矢理一緒に住まわせているお詫びとでも思つてくれ」

男は冗談めかして言つたが、どこまで本気にして良いのか、アヤには判断が付かなかつた。

「さあ、それでどうする？」

「死ぬのは嫌」

アヤははつきりと答えた。

「そうか。なら、君にもつ一度チャンスをあげよう。ただ、一つお願いがあるんだ」

「何？」

「君が生き人形になつてしまつたことを、生まれたのとは別の世界に生きていることを、僕と共に生きることを心から受け入れたら、僕の名前を呼んでくれ」

「名前？」

「そう、僕の名は……」

アヤは突然光に飲まれた。目の前の男に手を伸ばすと、それはなぜかアヤ自身の姿になつていた。そして、光に照らされた彼女の影になつた。

頬に柔らかなものが触れたので、アヤは無意識に手で振り払った。しかし、再び柔らかいものが頬に当たる。ペチペチと、今度は一度でなく、何度も繰り返し頬を叩く。もうちょっと眠つていいのに、アヤは鬱陶しげに目を開いた。

「……ティイ、しつこい」

目を開けると、やはりそこには猫がいた。ティイはアヤの顔をのぞき込んだ。

「おはよう。お加減はいかが?」

「まだちよつとじだるいけど、大丈夫よ。それより私、どのくらい寝ていたの?」

「一月ほど」

「え、そんなに!」

猫はアヤの枕元から飛び降りて床に座つた。アヤは上半身を起こして伸びをした。ティイはアヤの顔をじっと見つめていた。アヤは不審に思つたが、何も言わなかつた。

「……あんたに手を下すことにならなくて良かつたわ」

ティイが小さな声で呟いた。

男はまたもアヤの発狂を警戒していたのだろう。最初に目覚めた日、ティイがやはり目の前にいたのも同じ理由からだと言つていた。あんなことの後だ、おかしくなつっていても仕方はない。だから、手がつけられなくなる前に殺す。実に分かりやすい。

「私、SAN値が高いのよ」

通じる訳のないジョークを飛ばし、意味が分からぬといふ顔の猫を横目に、アヤは自分の体を確認する。切られたはずの腕にも、刺されたはずの胸にも傷跡一つなかつた。恐らく背中の傷も消えているのだろう。

「すごく綺麗に治つたのね。本当に便利な体だわ」

「旦那様と私の苦心の作よ！感謝しなさい」

ティイはむつとした顔でアヤを睨んだ。アヤは苦笑して、感謝の言葉を述べた。

猫は忙しいから後でまた来ると言つて、部屋を出て行こうとした。しかし、ティイはドアの前まで来たところでアヤを振り返り、小さな声で尋ねた。

「……ねえ、私が怖くはないの？」

ティイは顔を下に向けていて、アヤからは表情が見えなかつた。

「それほどでもない、かな」

アヤはあの怪物を思い出して、背筋に少し冷ややかな物を感じた。しかし、それでも目の前の生き物を怖いとは思わなかつた。

「そう……」

ティイはほつとしたような、でも納得がいかないというような顔をしていた。アヤを見上げて、ティイは神妙な顔つきで呟いた。

猫はまた後でねと言い残し、部屋から出て行つた。

一人になつた部屋で、アヤは先ほどまで見ていた夢を思い出していた。

夢を見るのは久しぶりだつた。この世界に来てから、彼女は夢を見なくなつていた。それが生き人形になつたためなのかは分からない。

あの夢は何だつたのだろう。彼女は考えた。喋つていた影たちは、彼女の心の代弁者だつた。しかし、影はそれぞれに特徴を持つていたような気がした。夢は無意識の現れだつたと言つたのは誰だつたか。アヤは思つた。先ほどのは無意識の発現とするには具体的すぎる夢だつた。

寝返りを打つた時、アヤはふと昔読んだ本の一節を思い出した。人間の命は一つだが、魂は複数あるといつ？？

突然ドアが開いた。男が入ってきた。一瞬、あの襲撃の夜を思い出し、せめてノックぐらいしてほしいとアヤは思った。

「元気そうで良かったと男は言った。男はアヤを診察し、異常がないことを確かめた。

「体の方はもうじき大丈夫そうだね」

「ありがとうございました」

アヤが頭を下げるとき、男はうんざりした表情で言った。

「……ああいう荒事はもう止めてくれ。再構成と再調整は面倒だ」

「すみません」

「分かってくればいい。非常事態だったし、巻き込んでしまって君には申し訳ないとも思つていてる」

「そんなことは」

「まあ、今回のことでの、君も色々事情を知つてしまつた。申し訳ないが、今後は君にも協力してもらうことが増えるだろ？……まあ、とにかく、二、三日は念のため休んでいいよ！」

「分かりました。ただ、ちゃんと説明はして頂けませんか？」

「いいよ。何が聞きたい？」

アヤには聞きたいことは色々あつた。しかし、まず聞くべきは……

「なぜ、あの人は化け物……いえ、あの、姿を変えたの？」

アヤの脳裏に、男の兄の変わりゆく姿とその末路が浮かんだ。彼女は吐き気をこらえるように歯をかみしめた。

「姿を変える、ね……何で化け物になつたかといえば、こここの魔力にあてられたからだよ」

男は楽しげに言った。しかしその時は笑つておらず、アヤは自分が観察されていることに気づいた。

「あてられた？」

アヤの疑問に、男が答える。

「中毒になつたとでも言えればいいんだろうか？」これは魔力が強すぎると、アヤは思つた。強すぎて、普通の生き物は長くいとその影響を受けてしまつ

「でも、私もあなたもティイだつて、ずっとここにいるじゃないですか？」

アヤの当然の疑問に、男はこともなげに言った。

「僕は少々特殊な体质でね。大量の魔力にも耐えられる身体を持っている。仕組みは違うけど、ティイも同じだ」

「どうしたことですか？」

「僕は周囲の魔力を集め、体に蓄えてしまう体质でね。そのせいで、普通なら耐えられないような高濃度の魔力にも正気を保つていられるし、体が化け物に変化することもない」

アヤは男の言っていることが分からず、眉間にしわを寄せて男の言葉を聞いていた。

「この場所は、この世界でも有数の魔力地帯でね」

「それは以前聞きました。魔力の特異点だとか」

「そう。だから、人間も動物も滅多にこの草原には入らない」

「……何でそんなところに城があるんですか？」

「ここはかつて古戦場だつた。ここはその時使われた砦だ」

城は見晴らしの良い高台にあり、場内からは草原を三百六十度見渡すことが出来た。沢山の質素な部屋や殺風景な中庭の様子を思い出し、アヤはここが砦だという言葉に納得した。しかし、問題はそこではない。

「何でここに戦争をするんですか？魔力は生き物にとつて有害なんでしょう？」

アヤの疑問に、男はさらりと言つた。

「その時は、ここは魔力の薄い地だつた」

「はあ」

「五百年ほど前、ここで戦争が行われていた時のことだ。突然空から強力な魔力が降り注いだ。伝説によれば、空が虹色に輝くと、戦場の生き物は皆異形に姿を変えたそうだ。逃げ延びた者も大半は正気を失つたという」

男は窓から外を眺めていた。つられてアヤも外を見る。いつもの

おだやかな草原だつた。

「混乱のうちに戦争はひとまず終結した。しかし、場所によつて強弱はあつたが、世界は強力な魔力によつて浄化された」

「じょ、浄化？」

深刻な事態とは似つかわしくない言葉に、アヤは思わず呟いた。

「そう、浄化。僕らの宗教ではそう言つてゐる。争いを続ける人間に神が罰を与えたのだと。そして、選ばれた人間だけが生き延びたのだとね」

黙示録がリアルで起こつたようなものだらうか。アヤはポカンとして男の言葉を聞いていた。

「……全く馬鹿げた理屈だけどね。ただ、實際生き残れたのはその時の人口の一割程度だつた」

「たつた一割……」

「一割も、だよ。魔力にある程度耐性がある者が、魔力の弱い地で、魔術を駆使して何とか生き残つたんだ」

「魔術は元々あつたんですか？」

「あつた。元々、極々弱い魔力がこの世界には存在してゐた。だから、魔力の流れをコントロールしたり、観測して住める場所を探すくらいのことはできたんだ」

壮大な話に、どこまで本当なんだろう?とアヤは少し疑問に思つた。男はそんなアヤの表情を見て、少しだけ笑つた。

「まあ、信じられない気持ちは分かるよ。とにかく、その時から世界は格段に強い魔力にさらされることになつた訳さ」

はあ、とアヤは間の抜けた相づちを打つた。窓から入つてきた風が、二人の髪を揺らした。

「……魔力は人や生き物に強烈な影響を及ぼす。そしてこの場所は魔力が強すぎる。だから、ここにいると普通は狂うか化け物になる頭を整理するために呴いたアヤの言葉に、男が頷いた。

「じゃあ、何での人たちや、査察官はここに来られたの?そもそも来ようと思つたのはなぜですか?そんな危険な場所なのに」

アヤの言葉に、男はニヤリとした。

「一つは君の作成および調整に魔力を大量に使用したからだ。一時

的に魔力濃度が極端に低下したから、その時に査察官が来た」

「この間の人たちは？ 査察官が来てから、結構時間が経つてますけど」

「君が消費する魔力が予想外に大きくて、中々濃度が上がりきらなかつた。そんな状態で転移魔術を使つたから余計に濃度が下がつた。普通の人間でもしばらくはここに留まる程度にね。……あいつらは買った荷物の中に紛れていたんだ。濃度が薄くなつたから、夜までの間、彼らはここに隠れていられた」

男の言葉にアヤは愕然とした。自分の存在が彼らを危険にさらしてしまつたのだ。アヤの心中を察したのか、男が言った。

「ああ、君のせいじゃないから。むしろ、君は自分の役割を果たしだけだ」

「どういうことですか？」

「僕が生き人形を作つたのは、魔力を消費することが目的だつたらさ」

「何、それ？」

男の思いがけぬ言葉に、アヤは戸惑いの声を上げた。

「ここに来ても発狂もせず、化け物にもならなかつた僕には、いくつかの課題が与えられた。ここは魔力の特異点で、そこに魔力貯蔵庫の魔術師が住み着いたんだ。することは一つ。魔術研究さ。研究をすることで僕は生きる糧を得てている。実際、いくつか成果を出しているし、それが国王にも伝わつて、僕は禁術の資料も与えられたんだ」

アヤは目を見開き、男を見つめて、次の言葉を待つた。

「僕に与えられた課題は色々あるんだけど、その内の一つが人間の生き人形作成だ。後、魔力濃度を下げるつてのもある。君を生き人形化することで、二つの課題を同時にこなしてみたんだ」

アヤはあまりのことに言葉もなかつた。そんな理由で自分を作つ

たのか、あれこれ悩んだのが馬鹿みたいだと、彼女は内心頭を抱えた。

そんな彼女の気持ちを知つてか知らずか、男は更に続けた。

「そんな訳で、君をここに置いている。君を起こすのに一ヶ月もかかってしまったのは、魔力濃度を十分に上げるためだ。ここに人が入れるようになるところくな事にならないのが分かつたしね」

「……」

「君の体を修復するついでに、魔力の消費量を抑えるように改良を加えた。これで、多少大きな術を使つても、魔力濃度は最低限保たれるだろう」

男の説明に、アヤは急速に色々なことがどうでも良くなつていった。彼女はがつくりと肩を落とし、あははと乾いた笑いを漏らした。男は相変わらずその様子を観察していた。

無言になつたアヤを見て、今日のところの位にしよう、と男は席を立つた。男の後ろ姿を見つめていたアヤだったが、ふと思いついて声をかけた。

「最後に、一つ聞いて良いですか？」

「何？」

男はドアの側で振り返つた。

「……あなたはなぜここに来たの？」

アヤの質問に、男はわずかに顔をしかめたが、すぐに表情をいつものニヤニヤ笑いに戻した。

「さつきも言つたけど、僕は魔力を集めて蓄えてしまう特殊体質だ。昔は平気だったんだけど、成長するに従つて、近くの人や環境に良くな影響を与えるようになった。魔力をコントロールすることで何とか押えていたんだけど、遂には触るだけで人や生き物を壊せるようになつた」

「……」

「うちは、代々魔術師の家系でね。厄介払いと実験を兼ねて、僕を

「ここに住まわせる」とした

「実験？」

「そ、魔力に強く汚染された地で、僕が生きていけるかを見るために。もしダメでも、ここからはそう簡単に家にも町にも帰れない。おかしくなつて死ぬだけだ」

「あ、なるほど」

得心がいったというアヤの言葉と表情に、男が苦笑した。

「随分軽いね。少しば同情してくれないの？」

何と言つたらいいのか分からず、アヤも苦笑した。

「いや、その合理性はあなたが私にしたのと同じだし……」

男は分からぬといふような顔をした。

「私がおかしくなつていたら、ティイに殺させるつもりだったんでしょ？」

アヤの言葉に、男の顔がわずかに歪んだ。男はハッと表情を殺し、アヤに背を向けると、そのまま出て行つてしまつた。

「お互い様だわ」

アヤはそう呟くとケタケタと笑つた。どうしてか笑いが止まらず、彼女は笑い続けた。なぜか涙も浮かんできたが、彼女は泣きながら笑い続けた。

数日後、元気になつたアヤは、再び元の日常に戻つた。体を鍛え、読み書きを勉強し、できない魔術を練習する平穏な日常だった。また、アヤにも一つ仕事が与えられた。城の掃除だ。これまで家事をほとんどこなしていた自動人形が壊れてしまい、修理が終わるまでは城の中のことをほとんどできなくなつてしまつていた。

男はと言えば、仕事が忙しいと言つてほとんど姿を見せなかつた。たまに会つと、さまたて青白い顔に不機嫌そうな表情を浮かべていた。

ティイによれば、この間の一件であちこちに脅しをかけて、これ以上の面倒が起こらないように釘を刺して回つてゐるらしい。人間嫌いの男が人間を避けるために人間と交渉している。面倒なことだ。アヤは男に同情した。

しばらく経つたある日、中庭で本を読んでいたアヤのところに男と猫がやつてきた。自動人形が直つたので彼女の仕事は減つていた。男はいつもニヤニヤ笑いを浮かべ、お茶を飲むけど一緒にどうかと誘つてきた。

修理が済んだ自動人形が、いつも通り茶器と茶菓子を運んできた。アヤは戯れにお茶を一口飲んだ。相変わらず酷い味で、彼女は顔をしかめた。

「そんなんにマズいの？」

ティイが面白そうに笑う。白い毛がふさふさと風に揺れ、アヤはその下の本体を思い返した。

「マズい。食べなくても平気な体で良かつたと心から思うわ……」

アヤは水で口の中に残つた味を流し込んで答える。それは良かつたと、男が楽しそうに笑つた。

「でも、マズいって感じるのは体がそれを口にしちゃいけないと判

断したと考えられるのよね……もしかしたら、私を構成している物質とこの世界の生物を構成している物質は違うのかもしれませんね」「違うみたいだね。この間調べてみたが、君の体の組成は我々とは異なつていたよ」

男があつさりと言つた。男は美味しそうに茶菓子を頬張つてゐる。違う世界の生き物だ。タンパク質やらDNAやらの構造や仕組みまで同じだつたら、その方が気持ちが悪いとアヤは思つた。

「この世界の生き物は、何でできるんですか？」

彼女の質問に、男はいくつかの物質名を述べた。しかし、彼女にはそれが自分の知つてゐる物質なのかそうでないのかの判別は付かなかつた。

この世界に関するアヤの語彙は、彼女の魂に混じつた男の魂に依存してゐる。日常的に使う基本的な言葉はおおよそカバーできているが、専門用語となるとやはり話は別だ。先ほどの物質名も、彼女には音としてしか伝わらない。アヤの持つてゐる語彙に、当てはまるものがないのだ。

君の知らない物質?と男が尋ねた。はい、と彼女が答えると、男はふーんという顔をする。その表情は相変わらずわざとらしく、アヤは自分の世界を馬鹿にされたような気がして、少しだけ腹立たしかつた。彼女は水を飲んで苛立ちをごまかした。

「そういえば」

アヤはふと思いついて口を開いた。

「一つ聞きたいことがあります」

男と猫がアヤの顔を見た。何だい?と男が聞き返した。

「魂の構造と性質について」

男はお茶をすすつて頷いた。アヤは話を進めた。

「魂は分割できると以前お聞きしました。その分割されたものは、全て同じ物ですか?」

アヤの質問に、男は菓子を食べながら答えた。

「分割された魂の性質のことか？元は一つの物を割つたんだ、基本的にその性質は同じはずだ。そう考えて、我々は魂を扱つている」「もし、違うとしたら？」

もし、違うとしたら?」

男は眉をひそめてアヤを見つめた。

「最近思し出した」とかあります  
私の世界での魂に関する説明の  
一つです」

「どんなもの？」

元イイも興味深そうに彼女を見ていた

人の魂は性格の異なるいくつかの魂の寄せ集めだという話です。興味深い。性格が違うとはどういふこと?

男はアヤの話は関心を持たぬよ。だが、アヤは口を開いた。

影響しますか？」

一 魂は精神、肉体共に深く関係し合っている。当然影響していると

考えるのが妥当だね」

説明する機会があつた。この機会で、

「人間」は兼々は一面が

「人間には様々な一面があります。例えば、私の場合なら、社会の一員である自分、子供……娘である自分、女である自分、研究者であつた自分、などがそれに当たると思います。一人の人間が魂を複数持つてゐるから、こういう多面性が生まれるので」

「人の人間には多様な一面があるが、それを担保しているのが魂の複数性である、という解釈で良いのだろうか？」

「なかなか面白い説だね。ただ、実際の観測結果として、魂は混じり合つし、分割した一部を喪失してもそれほど問題はない。それは君も実感として良く分かつてゐるんじゃないか」

「純粹に割り切る」ことはできないんだと思います。それぞれの魂は常に干渉しあって、お互いの情報をやり取りしあって、最低限の情報を取り合っているんですね」

男はしばし考え込み、やがて口を開いた。

「確かに、魂にどんな情報が含まれているかというの解析が難しい。必要な情報を引き出すことはできるが、どんな情報を持つているか、完全に開示させられるのはその持ち主だけだ」

いつの間にか、男は菓子を食べる手を止めていた。表情は真剣になつていて、いつもの作り笑いとは違つていた。

「……外部から情報を観測すれば魂は失われてしまう。だから、君の説を証明することは難しいだろう」

「別に証明したい訳じゃありません。ただ、こう考えると説明がつくことがあるんです」

「それは何だ？」

「……私が生き人形になつても狂わなかつた理由です」

男と猫は、アヤの顔を見つめた。男は少しだけ驚いたような顔をして、その後笑みを浮かべ、口を開いた。

「面白いね。話してみて」

「……ただの素人の仮説ですよ、構いませんか？」

「魂の喪失と混入という貴重な事象を経験した者の意見だ。聞くに値すると思うんだけどね」

アヤは少しだけ考えて、口を開いた。

「私はここに来て蘇るまでの間に、魂の一部を失つたそうですね」「そうだね」

「私が失つたのは、多分、自分が『生物』であるという認識や元の世界の一員であるという意識を強く持つた部分かと思います」

二人は静かにアヤを見つめていた。

「だから私は、私の知つている『生物』ではなくつてしまつた自分を受け入れ、ここになじむことができたのでしょうか」

「単純な感情の問題じゃないの？ 生きていて嬉しい、とか、別の世界に来られて嬉しい、とかの」

ティイイが口を挟んだ。

「違うと思います。……より正確に言えば、私は向こうにいた時か

ら生き物として死につつあつたんです。だから、精神と魂が弱つていた

「何よそれ」

「猫が不思議そうに尋ねる。見れば、男もよく分からぬという顔をしていた。

「私は自分が『人間』の『女』であるという実感が昔から薄かつたんです。だからといって、他の動物や『男』になろうとは思いませんでしたが。多分、これは私の魂の性質による気がします」

アヤは自嘲気味に笑い、目を伏せた。

「……昔から私は世界が、他人が怖かつた。気を許したら、自分が飲み込まれて壊される気がして……だから、私を守ってくれた両親の望むように、自分の形を作つて、その内側に自分を隠しました」

アヤは目を伏せたまま続けた。

「両親が死んで、私は今まで自分を守つていた鎧を失つてしまつた。維持する力をなくしてしまつたんです。結果、社会や人との関わり方が分からなくなつてしまつた」

ふうつとひとつため息をついて、彼女は続けた。相変わらず目を伏せたままで、男や猫の反応は見なかつた。見たくなかつた。

「……魂という概念が実在すると知り、私は思いました。自分のおかしさの理由をやつと説明できるのではないかと」

アヤが目を上げると、男と猫が黙つて自分を見ているのに気づいた。自分の話を真剣に聞いてくれているのが分かつた。

「私はずっと、自分の体を機械みたいだと思つていました。自分は、他の人が普通に持つてゐるモノを持つていかない、人間ではない物体なのではないかと」

アヤは軽く息を吸つた。呼吸は今の彼女に必要のない行動だが、深呼吸すればやはり心が落ち着く。

「科学を勉強しようと思ったのも実はそれが理由の一つです。もつと合理的に、自分を理解できるかも知れないと思って。精神医学や心理学の本もいろいろ読んでみたけれど、結局、自分のおかしさを

はつきりとさせることはできませんでした

「誰かに話したことはないの？」

男が静かな声で尋ねた。アヤは首を横に振った。

「親や友人に、それとなく尋ねたことはあります。ですが、彼らには私の言いたいことは伝わりませんでした」

誰にも自分の恐怖を理解はしてもらえない。この絶望感は彼女を苦しめ、人から遠ざける理由にもなっていた。

「ここに来て、体が変わつて、自分の感じていた自分のおかしさ？違和感の理由が初めて分かりました。……私は最初から人形だったんです。だから、『人間』の体に違和感を感じてたんです」

「あんた、何を言つているの？」

ティイが呆れたように聞いた。まあ分からぬだろう、とアヤは内心苦笑する。自分にだつて、最近まで分からなかつたんだから。彼女は心の中で呟いた。

「外から見える私は、元々操り人形なんです。私は自分を守る鎧の中から指示を出して、鎧を介して自分を操つていた。だから、鎧がなくなつて、私は自分が制御できなくなつたんです。……鎧は変化を嫌います。限られた人間関係と狭い環境の中で、私は自分を必死で守つていました。両親が死ぬ前の私だつたら、多分今の状況に絶望に嘆き悲しんでいたと思います。あなた方が予測していたように、発狂していたかも」

男が苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、何で今の君は正気なんだ？正気に見えて、実は狂つているのか？」

男の問いに、アヤは薄く笑みを浮かべた。

「正気と狂気の境なんて曖昧です。あなただつて自分が正気だと胸を張つて言えますか？」

男はふつと鼻で笑い、僕は正常だよ？と言つた。

「正常なあなたが私を正気だと言つて下さるなら、私もきっと正常です」

彼女は水を飲みながら答えた。

「……私が正気でいられるのは、今まであやふやだった自分の身体を『生き人形』という形で定義できたことと、内部から自分を見つめる他者の視線を獲得できたことが大きいかと思います」

「他者？」

男は眉をひそめた。アヤは男の目をまっすぐに見つめ、言った。

「あなたですよ。シッセ・ヴィティカさん。もつと正確に言つなら、私の魂に混ぜられた、あなたの魂だったモノ、です」

「ああ、良かつた。名前を呼んだら何か起こるかもしないと思つて、ちょっとドキドキしてたんですね」

中庭を包んだ静寂を破つたのは、アヤだった。男も猫も不意を突かれ、ギョッとして固まつっていた。彼女は一人の様子を見て、微かに笑つた。

「名前に関してはお二人とも随分と意味深な行動でしたから、何があると思ってましたが、違うんですか？」

「……いや、単に魂の定着具合を試すためだ」

男の顔にはまだ狼狽の跡が残つていた。それをごまかすように、男をカップを手にして口元へと運んだ。

「ああ、私があなたの魂由来の情報を認識できるか、ということですか」

私は色々考えすぎていたのかもしれない。彼女は改めて思つた。

「……話は戻るが、なぜ、僕の魂が君の正気を保つ役に立つんだ？」  
男が口を開いた。奇妙なことに、その表情は不安そうに見えた。  
「それを説明するのはなかなか難しいのですが……私の魂に混ざつた完全な『他者』が、内側から『私』を定義してくれるから、とでも言えれば良いんでしょうか」

それに、とアヤは付け加えた。

「他人を受け入れても、自分が壊れないのが分かつたからです」「男の目が一瞬、揺れた。

「それが、僕の魂でも？」

アヤは男の目を見据え、うなづいた。

「あなたのくれた魂は、確実に『私』を支えてくれています。だから、私は『自分』を保つて、正気でいられるんですよ……」

中庭に静寂が戻つた。アヤはふっと静かに息を吐いて、目の前の

男と猫を見ていた。一人とも眉を寄せて考え込んでいて、何とも言  
い難い顔をしていた。猫がこういう顔をしていると可愛いな、とア  
ヤには若干場違いなことを考える余裕もあった。

正直、自分でも説得力にかける理屈だとアヤは思っていた。それ  
でも、考えを正直に口にしてみれば、その言葉は彼女を納得させた。  
現在の自己の状態について、かなり適切に説明できたのではないだ  
ろうか。彼女はやりきった満足感すら覚えていた。アヤはコップに  
水をつぎ足し、口に呑んだ。

そのうち、男がおもむろに口を開いた。その顔にはいつもの作り  
笑いが浮かんでいた。

「生き人形作成の一番の問題は何だと思つ？」

唐突な質問にアヤは面食らつたが、素直に分からないと答えた。

その答えに、男がニヤリと笑つた。

「被験者が大抵発狂することだ」

「は？」

「死んだ人間を生き返らせる術が禁術と言われるのも、実はこれが  
原因なんだ。魂も体も同じなのに、再び生き返つたモノは、どうい  
う訳か皆おかしくなつていて。意思疎通を図つて成功したケースす  
ら稀だ」

男の説明によれば、アヤの前にも小動物で何回か似たようなこと  
をしたらしい。しかし、ほとんどは目覚める前に死に、たまに目覚  
めても狂つて暴れるだけだったという。

「暴れられると小動物でも結構厄介なんだよね。死んじゃう方がマ  
シだつたよ、本当に」

男はウンザリした顔で言つた。猫もうんうんと頷いている。しか  
し、これにはさすがのアヤも呆れた。

「そんな状態で、よくも私を被験者に……」

「だからさ。どうしても人間で試したかったんだ。精神は肉体より  
も魂のありように強く影響を受ける。だから、問題が魂にあるのは

分かつてた。人の魂なら意思疎通も何とかできるし、情報も比較的容易に取れるしね……」

「こちらの人間では試さなかつたんですか？死体くらいなら用意してもらえば……」

アヤの質問に、ティイがムツとして答えた。

「さすがにそこまではやつてないわ。新鮮な人間の死体なんて簡単に手に入るものじやないし」

「でも、この間の連中は私が生き人形だと知つてましたよね？その材料をどこから入手したと考えていたんでしようか？」

一人が黙つた。ああ、この人たちは何かやつてる。アヤは生暖かい気持ちになり、深入りは止めようと思つた。今後もできれば関わりたくない。

「まあ、それはどうでもいいです。それより、なぜ発狂してしまったんでしょう？」

クツキーをつまみながら、男が答えた。

「一般的に、魂の持つ身体イメージと実際の身体イメージが異なってしまうことが原因じやないかと考えられている」

彼の説明によれば、人間の魂を動物に入れても魂は定着しないし、その動物は動かない。逆に動物の魂を人間に入れてもダメだという。「魂が肉体を受け入れられず、結果として発狂してしまうんじやないかな。君も見ただろ？魔力で精神も体も狂つたあいつを……」

男の目が怪しく光つた。アヤはあの光景を思い出しそうになり、軽く目を伏せた。

「精神が肉体の変化に耐えられるかどうかは、それを支える魂次第ともいえる」

なるほど、アヤは納得してうなづいた。

「では、先ほどの説明はあながち間違つてはいないかもしけないということになりますね」

そうだね、と男と猫は同意した。なぜかその顔は曇つていた。そ

の理由は、アヤには分からなかつた。

再び、中庭を沈黙が包んだ。

柔らかな風にすがすがしさを感じて、アヤは空を見上げた。壁に丸く切り取られた薄い水色の空は、彼女の故郷のそれとは違つていた。

やがて、彼女は残りの水を飲み干し、口を開いた。

「それで、私はこれからもここにいて良いのじょうか？」  
「構わないよ。でも、それでいいのか？」

「何がですか？」

なぜこんなことを聞くのだろう。アヤは疑問に思った。  
「君は壊れるか、僕が死ぬまでここにいることになるよ。僕とティイと他には人形しかいない、この城で」

「分かっています」

娯楽も少ないし、退屈はするかもしれない。それは彼女にとつて大した問題ではなかつた。でも、彼女の答えに男は納得していないうに見えた。もしかして……と彼女は呟いた。

「私は邪魔ですか？」

「そういう訳じやない」

アヤは男の意図するところが全く分からず、困惑した。

「……あなた方からすれば人形が、一つ増えるだけじょう？」

彼女は一人を交互に見つめて言った。

「大したことはできませんが、私ができることは自分でしますし、もちろんお一人のお手伝いも喜んでやりますよ」

「……あんた、本当にそれでいいの？」

ティイがたまらないという感じで口を挟んだ。

「私は魔力を消費するためだけに作られた、機械みたいなものなのでしょう？」

「まあ、確かにそう言つたが……」

「あの言葉を聞いた時、私はもう『人間』になる努力をしなくて良

いんだつて、そう思いました

「……」

二人は黙つて彼女を見ていた。

「あなた方がそれをどう思つかは知りませんが、それは私にとつて救いだつたんです」

男は困惑し、ティイは呆れたような顔をしていた。アヤはその顔を見て、少しだけ笑つた。

「だつて、人間のふりをしていた人形が、本物の人形になれたんですから」

アヤの言葉を聞き、男と猫はなぜか下を向いて黙つていて。何なのだろう、この反応は？ 訳が分からぬまましばらく様子を見ていたアヤだつたが、やがて微妙な沈黙と重苦しい空氣に耐えきれなくなつた。彼女はこの場を退散しようと席を立つた。

立ち上がつた彼女を、二人が見た。その視線に、アヤはいたたまれないものを感じた。自分はよっぽど変なことを言つてしまつたのだろうか？ 彼女はわずかに後悔した。でも、言いたいことは全部言えた。ずっと誰かに聞いて欲しかつたことを言葉にできた。心の中で鬱屈していた淀みが取れたような気がして、彼女は爽やかな気分すら感じていた。

「疲れたので先に戻ります」

彼女はそう言つてから、ふと思いついて右手を男に差し出した。

「今後ともよろしくお願ひします」

そう言つて軽くお辞儀したアヤを、男は困惑の表情で見つめていた。どうしたらしいか分からぬ。男の顔は明らかに動搖していた。差しだした手の收まりが付かず、アヤも少し困つた。ふと横を見ると、ティイもまた当惑の表情を浮かべていた。ああ、もしかしてと、彼女は口を開いた。

「握手です。握手。私の世界の非常に一般的な挨拶です」

じついう習慣はないんだろうと彼女はあたりをつけた。彼女の言

葉に、男は戸惑いの表情を浮かべたまま、おずおずと手を差しだしてきだ。アヤは男の手を軽く握った。屋外に長時間いて冷えたのだろう。その手は乾いていて少し冷たかった。

なぜか狼狽していいる猫にも、アヤは手を差しだした。柔らかな肉球が手のひらに軽く触れられた。

「それでは、お先に失礼します」

アヤはそう告げると、困惑したままの一人に背を向け、自室へと戻つた。

それから三日が経つた。

男や猫は彼女の前に自分から姿を現すことはなかつた。一度廊下でティイを見かけたことがあつたが、猫はアヤに構つてゐる暇などないという風にあつていう間にいなくなつていまつた。しかし、それはこれまでにも何度かあつたことで、アヤは全く気にしてはいなかつた。彼女はいつもの通り城の一角を掃除し、その後は本を読んでいた。

昼が過ぎた頃、アヤは読んでいた本を閉じ、ベッドから起き上がつた。この時間帯、彼女は暇があれば中庭に行くのが日課になつていた。中庭は涼しく快適で、夕方まで時間を過ごすのに最適の場所だつた。また、図書室が近いという利点もあつた。

部屋を出て廊下を進み、階段を下りる。城の中はしんと静まりかえつていて、相変わらず人の気配がない。自分以外誰もいないのではないかと思うほどだ。この城は孤独が嫌いな人にはとても怖い場所だらう。

中庭にも人の気配はなく、アヤはベンチに腰を下ろした。時折、自動人形が回廊を行き来する音がする以外、物音はほとんど聞こえてこない。静寂が支配し、時が止まつたような場所で、彼女は一人ページをめくつた。

読み書きはかなり上達し、アヤは一人でもある程度の本を読み通せるようになつていて。とはいへ、それはこの世界の学問の子供向け教科書や、図鑑のような図表が中心の本だけである。もつと色々なジャンルの本を早く読めるようになりたいと彼女は思つていた。彼女は子供の頃から本の虫であった。

しかし、アヤには一つ不満なことがあった。彼女にはこの世界の『物語』が読めなかつた。正確に言えば、読めないのではなく理解できなかつた。

城の図書室には、小説など文芸作品も何冊か置かれていた。今読んでいるのもそういう作品の一つだつた。この世界では古典的なもので、本当なら子供でも読み通せるものらしい。しかし、彼女にはどうにも意味が分からぬ。ストーリーらしいものは何とか押さえることができるのが、理解できない単語が多い。また、細かいエピソードを把握できなかつた。

分からぬ部分を読み飛ばし、何とか読み進めていたアヤだつたが、そのうち、彼女はストーリーを追いかけることもできなくなつた。アヤは諦めて本を閉じた。

ストーリーはよくある英雄譚で、この世界の成り立ちを示した神話のような内容だつた。彼女は元の世界でそれこそ数え切れなくらい、この手の物語を読んでいる。なぜ読み通すことができないのか、彼女には不思議だつた。どういう訳か、このようなことは、なぜか学問に関する書籍ではあまり起こらない。図鑑でも読もう、そう思い直して、アヤは図書室へと向かつた。

図書室に通じる扉は、中庭に面した回廊の一角にある。扉を開けると、古い紙の匂いがアヤの鼻をくすぐつた。一瞬、彼女はかつての自宅の書斎を思い出した。

図書室の本の配置はかなり適当で、ある程度のジャンル分けがされているだけだつた。沢山の本棚が所狭しと並び、そのどれにも隙間なく本が詰め込まれている。入りきらなかつたのだろう、床にも本が積まれている。アヤは隙間を縫つてそつと移動した。

読んでいた本を戻して、アヤは別の本を物色し始めた。どの本を見ても良いという許可はもらつていたが、持ち主である男に迷惑をかけないよう、彼女はその配置ができるだけいじらないようにしていた。一見、本は適当に積まれているようだが、恐らく男はどこに

どの本があるかおおよそ配置しているはずだ。それは彼女自身の経験からも分かつていた。

ふと、彼女は傍らに本の山に目を留めた。それは『生物の構造』と『生物の構造』というタイトルの立派な本だった。手にとつてペラペラとめぐると、様々な生物の写実的な絵や解剖図が載っていた。これにしよう、アヤはそれを持って再び中庭へと移動した。

アヤはテーブルに本を置いて開き、ぼんやりと絵を眺めた。その中には鳥や猫のようにアヤにもなじみのある生き物から、手足の生えた蛇や角を持つたずんぐりした馬など、沢山の生き物が紹介されていた。

この世界の生き物にも、基本的には雄と雌があった。雄が配偶子を雌に渡し、子を為す。この仕組みは基本的にはどうやら同じらしい。また、生物の基本構造？？口、消化管、肛門という筒状の構造？？も、元の世界と共通していた。もうちょっと違っていても良いのに、彼女は何となく思った。

ページを繰つていくと、人間の項にたどり着いた。全裸の男女が描かれている。外見的特徴は基本的に同じように見えた。解剖図を見ると、内臓の構成や種類、形はアヤの知る人間とはやや異なっていた。ああ、やっぱり違うんだ、と彼女は少し嬉しくなって、解剖図とその注釈をじっくりと眺めていた。

その時、かすかに足音が聞こえて、彼女の思考は現実に呼び戻された。音の方向に目を向けると、白い髪の男が歩いているのが見えた。

この間の一件もあって、アヤは何となく気まずさを感じた。こっちに来ないと良いんだけどと彼女は思った。しかし、彼は彼女に気づくと、なぜか中庭へと足を向けた。

「やあ」

男が声をかけてきた。その表情はいつもと変わらず、アヤも軽く

頭を下げる。

「ほんにちわ、シッセさん」

シッセと呼ばれた男の顔が一瞬こわばつたのを、彼女は見逃さなかつた。しかし、男の感情はいつもと同じ薄笑みに隠されてしまった。

「『生物の構造』か。生物学の名著だね……それ、面白いだひつっ。」「はい、そうですね」

男はテーブルに置かれた本を見やつた。開かれたページの『人間』の絵に、男はニヤリと笑つた。

「『人間』に興味があるの？」

「当然気になりますよ。だつて、別の宇宙に生き物が、しかも自分の種に似た別種の生物がいたんですよ。気になつて当たり前じやないですか」

「……」

なぜか男の表情が少しだけ曇つたように見えた。なぜだろうとアヤは一瞬思ったが、すぐに勘ぐるのを止めた。気になつていた疑問を男にぶつけるチャンスであることに気づいたのだ。

「これつてやつぱり収斂進化ですかね？」

「しゅうれん？」

「よく似た環境にある地理的に分断されているの」一つの地域で、別種の生き物の形が同じに形に進化することです」

宇宙を超えて、というのはさすがに想像の範疇外だつたけど、アヤは心の中で付け足した。

「なんか、というのは？」

男の不思議そうな顔に、アヤは軽く衝撃を受けた。まさかとは思うが、この世界には進化論が存在しないのか？

「えつと、進化というのは……」

「ああ、『ごめん。今はちょっと忙しくて……また今度聞かせてくれるかい？それじゃ」

説明しようとしたアヤの言葉を遮ると、男は彼女の脇を通り過ぎ

て行つてしまつた。

中庭には、アヤだけが残された。この世界には進化という概念がないのか？彼女は先ほどの衝撃の余韻を引きずつたまま、目の前の本のページを次々にめくつた。

本の中に、進化に関する内容は含まれていなかつた。元の世界であれば、系統樹の一つも必ず載つてゐるはずだ。目次や索引を見ても、それに当たる内容は見当たらなかつた。

また、アヤは各生物の分類についても全く触れられていないことに気づいた。生物種は生息地ごとに分類されているだけで、その種がどのような生物群に属しているかについて書かれていないのだ。彼女は本を片手に、図書室へ戻つた。生物学関係の本をいくつか確かめたが、進化学はおろか、分類学についての記述すら見つけることはできなかつた。

本の山の前で、アヤはしばらく考え込んでいた。しかし、やがて別の棚に行き、次々に本を開いていった。

アヤが図書室から出ると、空は既に赤く染まつていた。丸く切り取られた空には雲一つなく、赤い天井のように見えた。

部屋へと戻ったアヤは、扉に鍵をかけると、そのままベッドへだらりと横たわった。手足を大の字に開き、ぼんやりと天井を見上げた。そして、先ほど気づいたことについて考えた。

この世界の学問は、元いた世界の学問水準からすればかなり劣っている。薄々感じていたことではあったが、それは自分がまだこの世界について十分知らないためだという可能性もあった。しかし今日、彼女は図書室で、それが多くの分野についていえることであると確信した。

しかし、それは無理もないかも知れない、彼女は思った。この世界には『魔術』という特異な技術と理論の一大体系が存在する。それは物質の性質を変え、遠く離れた時空をつなげ、無機質や生物までも操作することができる万能の術である。魔力に汚染され、人も資源も限られている中で一番に追求しなければならない学問、それは間違いない『魔術』だ。

ただ、と彼女は睡魔に侵されつつある頭でぼんやりと考える。この世界の物理現象や物質などは元の世界とそれほど変わらない。モノを落とせば地面に落ちるし、太陽の移動に従つて空は青から赤へと色を変える。彼女が元の世界で学んできた『科学』は、きっとこの世界にも応用できるはずだ。

眠りに落ちる直前、彼女の思考はこの一点に集中した。??私も、役に立てることが見つかったかも知れない。

アヤの目が再び覚めた時、部屋の中はすっかり暗くなっていた。窓からは冷たい夜風が吹き込み、窓の戸をカタカタと揺らしていた。アヤは窓を閉めようと思い、のろのろと立ち上がった。窓辺に立つた彼女は、その外に広がる光景に思わず息を飲んで立ち尽くした。空一面に星が満ちていた。沢山の星々が黒い空を覆わんばかりに

瞬いている。銀色の点描で描かれた川が正面の山脈へと続き、その柔らかな光が山の影をつつすらと浮かび上がらせていた。

今まで見たことのない光景に、アヤは窓辺に立つたまま呆然としていた。彼女はしばらく立ち尽くしていたが、やがてあることを思い出し、窓を閉めた。

フードの付いた長い上着を羽織り、薄いブランケットを脇に抱え、彼女は部屋を出た。静かに廊下を進み、階段を上がる。夜の城は昼以上にひつそりと静まりかえっている。足音と衣擦れの音が、昼以上に響いているような気がした。まるで肝試しみたいだと彼女は思つた。しかし、そんな暗闇を明かりもなくひつそり歩いている彼女は、肝試しに来た子供ではなく、彼らを驚かす幽霊の方だろう。そう考えてアヤは一人微かに笑つた。

階段の先にあるドアをそつと開けた。その先は城の屋上になつており、ぐるりと一週歩けるようになつてている。この場所はアヤの掃除担当場所の一つで、その眺めの良さは折り紙付きだつた。元々小高い丘の上に立つこの城は、この平原を一望できる場所にある。また、元々が砦として立てられているため、外周の三百六十度を見渡すことができる。昼間は何度か来たことのある場所だつたが、夜中に来たのは初めてだつた。

アヤはドアを閉め、空を見上げた。思つた通り、すばらしい眺めだつた。星空がドームとなり、彼女の上空を覆つていた。アヤは入り口の近くにあつた石のベンチに座つた。

「プラネタリウムみたい……」

天球を見上げ、彼女は思わず呟いた。夜空には雲一つなく、数え切れないほどの星で埋め尽くされていた。淡い光が微かに地上を照らし、その影だけを浮かび上がらせている。星が降るようだというのはこういうことなのか。都会の空しか知らない彼女にとつて、それは初めて見る光景だつた。

不意に、アヤの脳裏にかつて恋人と行つた最新型プラネタリウムの記憶が蘇つた。あれも良くできつていて美しかつたけれど、やはり本物の星空にはかなわない。天文学好きの彼のことだ。この星空を見たら、きっと喜ぶだろうとアヤはわざかに口元を緩めた。そして同時に、かつて自分が彼にした仕打ちを思い出した。自己嫌悪と後悔の念が彼女の胸に去來した。

??せめてあの子と幸せになつてくれればいいんだけど、アヤは思う。最後まで私の側にいてくれようとした二人。しかし今の彼女には、彼らの行く末を知る術は存在しない。

あの一人に一度謝りたかった。私が死んだ（実際には死んでいないが）と知つたら、彼らはどう思うのだろう？…… そういえば、両親のお墓はこれからどうなるんだろう？私のアパートは誰が片付けてくれるのだろうか？あの研究はちゃんと実用化されたのだろうか？……

二人のことをきつかけに、アヤの心に捨てたはず世界への思いが蘇つてきた。未練はないつもりだった。しかし、ずっと生きてきた世界には多くのしがらみが残っている。それを整理できていないことは、彼女にとつてはいささか不満だった。綺麗に消える事なんてできないんだな、と彼女は苦笑した。

持参したブランケットを枕に、アヤはベンチに横たわつた。視界全てが星空に覆われた。空を飛んでいるような、あるいは無重力の宇宙空間に投げ出されたような奇妙な感覚に囚われて、アヤは不安を覚えた。

一面の星空に彼女の知る星は一つもない。馴染みのない夜空は、彼女が異郷の地にあることをはつきりと突きつけた。私は孤独だ？？この世界に一人きりだ、と。

ふと気がつくと、アヤは小さな声で歌つていた。彼女は思いがけない自分の行動に驚いて、一瞬声を止めた。しかし、この場所なら

誰かに迷惑をかけることもないだらう、そう判断して、アヤは再び歌い出した。

それはある映画で使われていた外国語の曲だつた。その美しい旋律と映像は彼女の心に強い印象を残した。あまり音楽に興味のなかつた彼女には珍しく、サントラCDを購入するに至つたほどだ。CDを聞き、彼女はもう一度衝撃を受けた。一見明るく爽やかなメロディーに乗つて歌われていたのは、希望を失つた心を描いた暗い歌詞だつた。それ以降、彼女は歌詞を暗記してしまつほどこの曲を聴いていた。

以前のアヤは、どうして自分がこの曲にこれだけ惹かれたのか分からなかつた。しかし、今の彼女にはその理由が分かつていて。

？？歌われているのは私だ、私と同じような人たちだ。

アヤは死んだ自分の魂と、捨ててしまつた世界のために歌つた。それは、アヤ自身が歌う彼女自身のためのレクイエムであつた。彼女の口からこぼれる小さな旋律は、そのまま夜と同化して消えていつた。

再び静寂に包まれて、アヤはぼんやりと空を眺めた。彼女は世界と一体化したような感覚に囚われ、思つた。この広い宇宙の中に、たつた一つ小さな異物が紛れ込んだところで、一体何の問題があるのだろう？

アヤは目を閉じ、口元を微かに緩めた。

そして、そのまま朝が来るのを待つた。

ある昼下がり、アヤがいつものように中庭に行くと、男と猫が何やら議論していた。テーブルには何か液体の入った小さなガラス瓶が沢山並べられていた。一人はそれを杯に注いで匂いをかいだり、味見をしたりを繰り返している。

「こんにちわ。……何をなさっているんですか？」

アヤが声をかけると、一人は顔を上げた。男の顔はいつもより若干血色が良く、雰囲気が少しだけ明るい。

「やあ……酒の試飲をしてるんだ。君もどうだ？」

男はおどけたような口調だった。いつもと違う男の様子に彼女は少し戸惑つた。

「発酵酒の保存方法を検討してるの。もつと長期に保存できる方法がないかって」

ティイが男に代わり答えた。聞けば、これも『課題』とやらの一つらしい。魔術って何でもありなのね、思わず呟いたアヤの言葉に二人はなんだよと笑つた。どうやら一人とも少し酔つているらしい。

いつもと異なる陽気な雰囲気に不安を感じて踵をかえそうとしたアヤに、一瞬早く男が声をかけた。座るようにと勧められ、アヤは仕方なく空いていた席に座つた。

「……で、色々試してみた結果がこれだ」

男は一つ一つ瓶を取り上げつつ、何をやつたのか上機嫌に説明した。解説を聞きながら、アヤも瓶と中身を観察した。

緑色の瓶を満たす液体は、赤ワインによく似ていた。実際、赤い果実を発酵させて作る酒らしく、少し甘つたるい匂いがした。アヤは恐る恐る少しだけ口に含んだ。やはり匂いから予見される味はせず、その風味はワインよりもビールに似ている気がした。また、ア

ル「ホールが含まれている感じはしなかった。多分、彼らは別の物質に『酔つて』いるのだろう。

アヤは酔つぱらいで達を観察した。男はいつもより饒舌で明るいし、猫もどうでも良いことでケラケラ笑っている。酔つ払いには関わりたくないなど、アヤは頭の片隅で考えた。

「酔つ払いとは失礼だな」

男の突然の言葉に、アヤはビクリと肩を震わせた。今のは、心を読まれた？

「読めるつて最初の頃に言つただろう？信じてなかつたのか？」

男は実に楽しそうに笑つている。猫もニヤニヤしていた。アヤは何とか言葉を繋げようと声を出しだが、いえ、とかあの、とか短い言葉しか出でこない。

「こ」の間は僕に侵入者だつてメッセージを送つてくれたじゃないか

男のニヤリとした顔に、彼女は襲撃の夜のことを思い出した。そういうえば、そんなことをしたような気がする。確かに自分の思ったことは男に伝わるらしい。しかし、それにしても……

「それにしても、何？」

「いえ、心が読めるなら私の気持ちとか考え方とか、いちいち喋らなくて伝わるんじゃないですか？」

「まあ、ある程度は分かるよ」

「ある程度？心が読めるなら、もっとダイレクトに理解できるのは？私もつたない言葉で色々説明する必要がないし……」

アヤがそう言つと、男は少しだけ困ったような顔をした。アヤは男の回答を待つたが、彼は杯を手にしてまた酒をあおり始めた。どうやら説明する気はないらしい。彼女は不満に思つたが、やがて諦めた。まあいい、時間はまだある。

「まあ、それはいいとして……それで、良い方法は見つかりましたか？」

アヤの問いに、それまで陽気だった一人が突然しゅんと沈んだ。

聞くまでもなく、ダメだったのだな。

「……」

「そうなのよ。これで何年田になるかしり……」

男と猫は遠い田で空を見つめた。

「どうしても一定の割合で腐ってしまうものが出てきてしまう。何をやってもだ」

「グツグツ煮ぢやつたものだけよ。まともに成果が出るのは。でも、味も色も落ちぢやつてお酒じやなくなつぢやつの」

ティイの嘆きに、アヤはふと思つ出した。

「パストーリゼーション」

アヤの咳きに、男と猫が怪訝な表情を浮かべた。

「あ……えつと、低温殺菌法と言つたらいいのかな。高温処理が有効なら、低温で長時間加熱する方法も多分有効ですよ」

「低温で長時間？」

「そう、品質が下がらない程度の温度に保つて、しばらく置いておくんです。その上で密封すれば、腐敗は起こりにくくなります」

「……どう原理だ？」

男が眉をひそめて尋ねた。表情は険しく、少し怖いくらいだった。

「単純な話です。腐敗はそのお酒に含まれた微生物によるものです。だから、加熱することでその菌を殺してしまつて、それから封をすれば腐敗現象は起こりません」

「びせいぶつ、とか、きんつて何よ?」

ティイが無邪気な口調で聞いた。いつもより素直で可愛いなあと、アヤは少しだけ思つた。

「田には見えない微小な生物ですよ。そのお酒の中にもたくさん含まれているはずです」

「田に見えないほど小さな生き物? そんなのいるわけないじゃない」アハハと猫が笑つた。つられたのか、男も笑つている。アヤは少し腹を立てたが、反面、知らなければこんな反応だつとも思った。

「多分いますよ。」この世界の生き物は、私の世界とよく似ているから。顕微鏡……小さいモノを拡大して見られる道具を作れば分かります。??同じような問題は私の世界にも起っています。でも、この方法で解決されました」

きつぱりとしたアヤの言葉に、男が笑うのを止めた。心を読んで、彼女が本気で言っていると理解したからだろう。

「……試してみるよ」

「本気ですか？田那様」

ティイが笑い転げながら言った。この猫は笑い上戸なのだろうか。アヤはそのおかしな様子を田の端で捕らえながら思った。

「うまく行つたら、もうちょっと詳しく教えてくれるかな？」

「もちろんですよ」

半信半疑という風情の男の様子に、アヤはやや落胆したが、始めはこんなものだと氣を取り直した。彼女の様子に、男が不思議そうな顔をした。

「……君は何をする気なんだ？」

「私にしかできないことを、です」

アヤはそう言つて笑つた。私にしかできないこと、それは、彼女の世界の知識をこの世界に伝えることだ。せっかく長い間勉強ばかりしてきたのだ。自分の知識や知恵がこの世界に通用し、影響を与えるか試してみたい。それは彼女が初めて抱いた自分自身の願いだつた。

アヤは静かに席を立つた。男は彼女の内心を読んだのかそうでないのか、不思議そうな顔でアヤを見つめていた。傍らではまだティイがグラグラと笑つていた。

「じゃ、あんまり飲み過ぎないよつこにして下さいね」

「ああ」

男の言葉を背に、アヤの姿は図書室へと消えた。

男はその背になぜか不吉なものを見たような気がして、それを振り払うように杯をあおった。

## 願い（後書き）

とつあえず一章終わります。

ここまで読んでくれた方、ありがとうございました。

これでひとまずアヤの話は終わります。

ここからは男側の話になります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6709v/>

---

魔術師と生き人形

2011年10月8日03時32分発行